汐月遺跡

SHIO TSUKI I SEKI

大分県佐伯市総合運動公園建設事業に伴う緊急発掘調査報告書 I

佐伯市文化財調査報告書

1990

佐伯市教育委員会

汐　月　遺　跡

1990

佐伯市教育委員会

序　　文

佐伯市の風土と歴史を生かした市民のコミュニティー広場となる佐伯市総合運動公園の開発に先立って緊急調査しました汐月遺跡では、過去調査された白潟遺跡、下城遺跡などの大分県でも貴重かつ価値の高い遺跡とは時代を異にして、奈良時代から平安時代に至る佐伯の歴史に於いて空白の時代を知る手掛かりを得ることが出来ました。

また、今回調査しました当遺跡に隣接する字上ノ台につきましては、古代豊後地方の倉院の一つ「佐伯院」の可能性も出てきており、将来有望な成果が期待されます。

しかし、今回調査しました当遺跡は各関係機関と協議を重ねた結果、記録保存ということになり、本書はその調査成果をまとめたものであります。今後の学術研究もしくは文化財保護活動に御利用頂ければ幸いです。

なお、調査開始より御指導、御協力頂いた別府大学賀川光夫教授、大分県文化課の方々、また夏期の暑い最中より現場作業に従事して頂いた方々に対し心より謝意を表す次第であります。

平成２年　３月

佐伯市教育委員会

教育長　鳥　井　喜　久　太

例　　言

1．本書は、佐伯市総合運動公園建設事業に伴い実施した佐伯市大字長良字柿ノ木畑他に所在する汐月遺跡緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、大分県文化課の指導を得て、佐伯市教育委員会が主体となり、平成元年10月1日より平成2年1月12日まで行なった。

3．遺構の実測・写真撮影については、新宅信久（佐伯市教育委員会社会教育課調査員）、山田健一（同副主幹）があたり、空中写真撮影については、有限会社　稲富（北九州市小倉南区）に依頼した。

4．遺物整理については、県文化課資料室の全面的な協力を得た。深く感謝致します。遺物の実測、写真撮影については、新宅と橋本一彦（別府大学学生）、広瀬圭子（県文化課整理作業員）があたった。整図については、新宅と吉武牧子・阿部みゆき（県文化課嘱託）・新庄章史（九州産業大学学生）・七森寛子・中須賀真美（別府大学学生）の協力を得た。

5．本書の執筆・編集は、新宅があたった他、第II章・遺跡の立地と環境　2・歴史的環境の一部を山田健一があたった。

6．題字は、佐伯市長佐々木博生の揮毫による。

目　次

第Ⅰ章　はじめに……1
1．調査に至る経過……1
2．調査体制……1
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……3
1．地理的環境……3
2．歴史的環境……3
第Ⅲ章　柿ノ木畑地区の調査……9
1．試掘の設定と本調査の遺構概要……9
2．出土遺構と出土遺物……9
1）　1号遺構……9
2）　2号遺構……13
3）　3号遺構……14
4）　4号遺構……21
5）　5号遺構……29
6）　6号遺構……29
7）　7号遺構……34
8）　8号遺構……35
9）　9号遺構……40
10）10号遺構……41
第Ⅳ章　平榎地区の調査……44
1．試掘と本調査の遺構概要……44
2．出土遺構と出土遺物……44
1）1号掘立柱建物跡……44
2）出土遺物……45
3．西斜面の調査……45
1）土層状況……45
2）遺物出土状況……45
3）出土遺物……46
第Ⅱ層の遺物……46
第Ⅳ～Ⅶ層の遺物……47
4）縄文時代の遺物……52
5）出土遺物……52

第Ⅴ章　柚ノ木元地区の調査……54
1．試掘と本調査の遺構概要……54
2．出土遺物……55
3．墨書土器について……58
第Ⅵ章　まとめ……59

挿　図　目　次

第 1 図　佐伯市所在遺跡分布図……2
第 2 図　汐月遺跡位置図と周辺地形図……7
第 3 図　柿ノ木畑調査区遺構配置図及び等高線図……8
第 4 図　1号遺構実測図……10
第 5 図　1号遺構出土遺物実測図……11
第 6 図　2号遺構出土遺物実測図……13
第 7 図　2号遺構実測図……13
第 8 図　3号遺構出土遺物実測図 (1)……14
第 9 図　3号遺構実測図……15
第10図　3号遺構出土遺物実測図 (2)……16
第11図　3号遺構出土遺物実測図 (3)……17
第12図　3号遺構出土遺物実測図 (4)……18
第13図　4号遺構実測図……21
第14図　4号遺構出土遺物実測図 (1)……22
第15図　4号遺構出土遺物実測図 (2)……23
第16図　4号遺構出土遺物実測図 (3)……24
第17図　5号遺構実測図……28
第18図　6号遺構実測図……30
第19図　6号遺構出土遺物実測図 (1)……33
第20図　6号遺構出土遺物実測図 (2)……34
第21図　7号遺構実測図……35
第22図　7号遺構出土遺物実測図……36
第23図　8号遺構出土遺物実測図……38
第24図　8号遺構実測図……39
第25図　9号遺構実測図……40
第26図　10号遺構実測図……41
第27図　平榎調査区遺構配置図及び等高線図……43

第２８図　平榎調査区１号掘立柱建物跡実測図……44
第２９図　１号掘立柱建物Ｐｉｔ－６礎盤実測図……45
第３０図　平榎１号掘立柱建物柱穴内出土遺物実測図……45
第３１図　平榎西斜面遺物の平面分布と垂直分布図……46
第３２図　平榎調査区西斜面土層断面図……47
第３３図　西斜面II層出土遺物実測図……48
第３４図　西斜面IV～VII層出土遺物実測図　(1)……49
第３５図　西斜面IV～VII層出土遺物実測図　(2)……50
第３６図　西斜面縄文時代トレンチ配置図……51
第３７図　西斜面縄文時代トレンチ出土遺物実測図　(1)……52
第３８図　西斜面縄文時代トレンチ出土遺物実測図　(2)……52
第３９図　汐月遺跡試掘トレンチ配置図……54
第４０図　柚ノ木元調査区範囲図……55
第４１図　柚ノ木元調査区西壁土層断面図……55
第４２図　柚ノ木元調査区出土遺物実測図……56
第４３図　柚ノ木元調査区出土土錘実測図……57
第４４図　墨書土器実測図……58

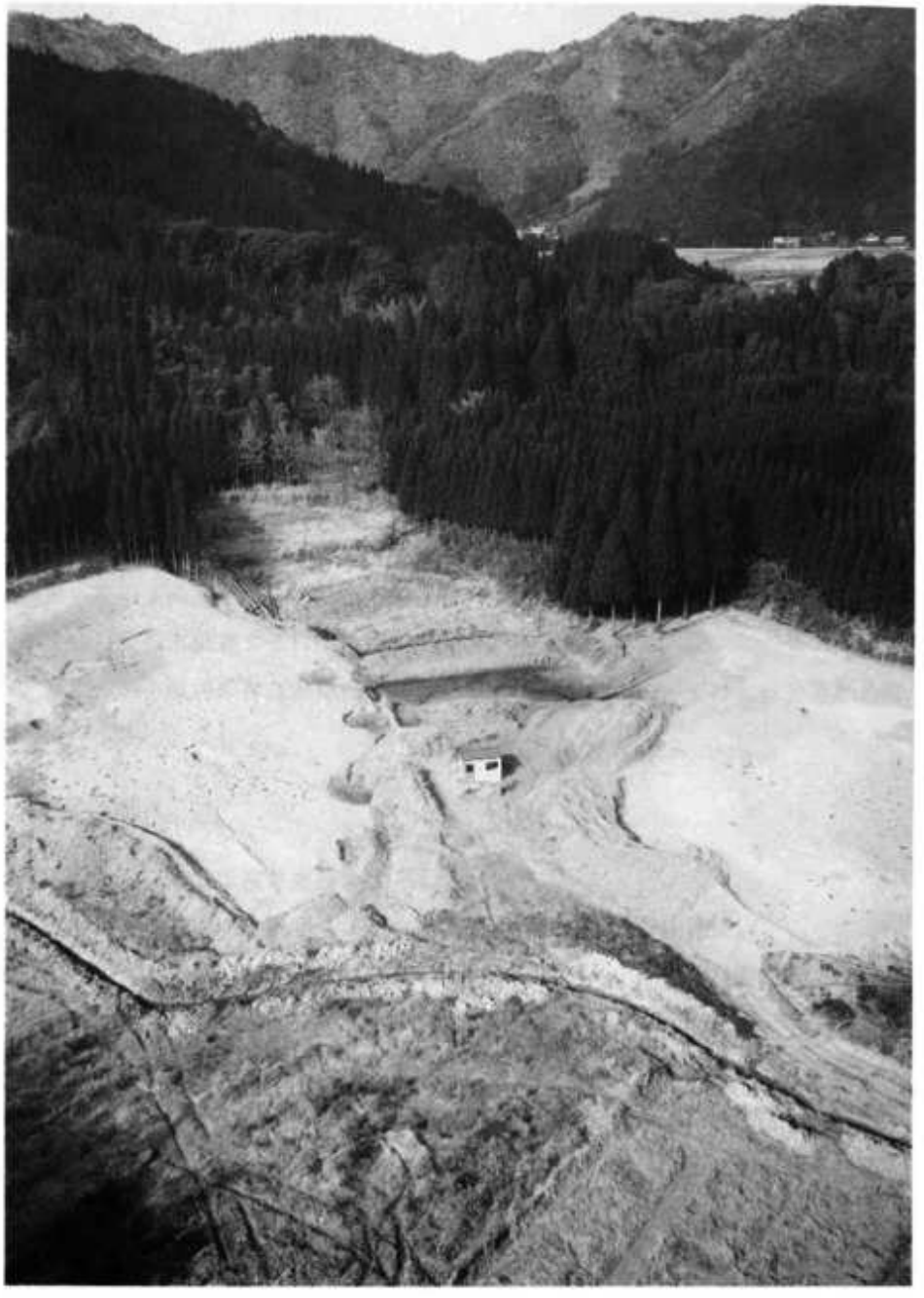
表　目　次

第１表　佐伯市所在遺跡詳細表……2
第２表　１号遺構出土遺物観察表……12
第３表　２号遺構出土遺物観察表……14
第４表　３号遺構出土遺物観察表　(1)……19
第５表　３号遺構出土遺物観察表　(2)……20
第６表　４号遺構出土遺物観察表　(1)……25
第７表　４号遺構出土遺物観察表　(2)……26
第８表　４号遺構出土遺物観察表　(3)……27
第９表　６号遺構出土遺物観察表　(1)……30
第１０表　６号遺構出土遺物観察表　(2)……31
第１１表　６号遺構出土遺物観察表　(3)……32
第１２表　７号遺構出土遺物観察表　(1)……37
第１３表　７号遺構出土遺物観察表　(2)……38
第１４表　平榎調査区西斜面土層観察表……47
第１５表　柚ノ木元調査区土層観察表……55

第１６表　柚ノ木元調査区出土土錘計測表……57

写　真　図　版

写真図版　A　汐月遺跡全景　（航空撮影）
写真図版　B　柿ノ木畑調査区全景（航空撮影）……6
写真図版　C　平榎調査区全景　（航空撮影）……42
写真図版　D　柚ノ木元調査区全景（航空撮影）……53
写真図版　1　柿ノ木畑調査区試掘状況……63
写真図版　2　柿ノ木畑調査区表土除去作業風景……63
写真図版　3　柿ノ木畑調査区表土除去直後風景……63
写真図版　4　柿ノ木畑調査区遺構検出状況……64
写真図版　5　柿ノ木畑調査区１号遺構……64
写真図版　6　柿ノ木畑調査区２号遺構……64
写真図版　7　柿ノ木畑調査区２号遺構内中央炉と遺物出土状況……65
写真図版　8　柿ノ木畑調査区３号遺構遺物出土状況……65
写真図版　9　柿ノ木畑調査区３号遺構完掘状況……65
写真図版１０　柿ノ木畑調査区４号遺構遺物出土状況……66
写真図版１１　柿ノ木畑調査区５号遺構……66
写真図版１２　柿ノ木畑調査区８号遺構遺構内集石状況……66
写真図版１３　柿ノ木畑調査区８号遺構完掘状況……67
写真図版１４　柿ノ木畑調査区９号遺構……67
写真図版１５　柿ノ木畑調査区遺構検出作業風景……67
写真図版１６　平榎調査区調査直前風景……68
写真図版１７　平榎調査区遺構検出作業風景……68
写真図版１８　平榎調査区１号掘立柱建物跡……68
写真図版１９　平榎調査区西斜面土層断面……69
写真図版２０　平榎調査区縄文トレンチ……69
写真図版２１　柚ノ木元調査区試掘状況……69
写真図版２２　柚ノ木元調査区土層断面……70
写真図版２３　出土遺物　(1)……71
写真図版２４　出土遺物　(2)……72
写真図版２５　出土遺物　(3)……73
写真図版２６　出土遺物　(4)……74



汐月遺跡　全景（航空撮影）

第Ⅰ章　は　じ　め　に

1）調査に至る経過

佐伯市総合運動公園は、「佐伯市総合計画」に基づき、市民皆スポーツによる健康で明るい市民づくりを推進するため、全市的に活用される運動公園の建設を目指し、昭和６２年より本格的準備に取りかかった。一連の諸問題を検討の結果、市の中心より約４ｋｍ程離れた当地区に建設場所を決定したが、この予定地に隣接して上ノ台遺跡や長良貝塚遺跡などの報告例もあり、市教育委員会は先ず県文化課の協力を得て平成元年１月に全域の遺跡分布調査を実施した。

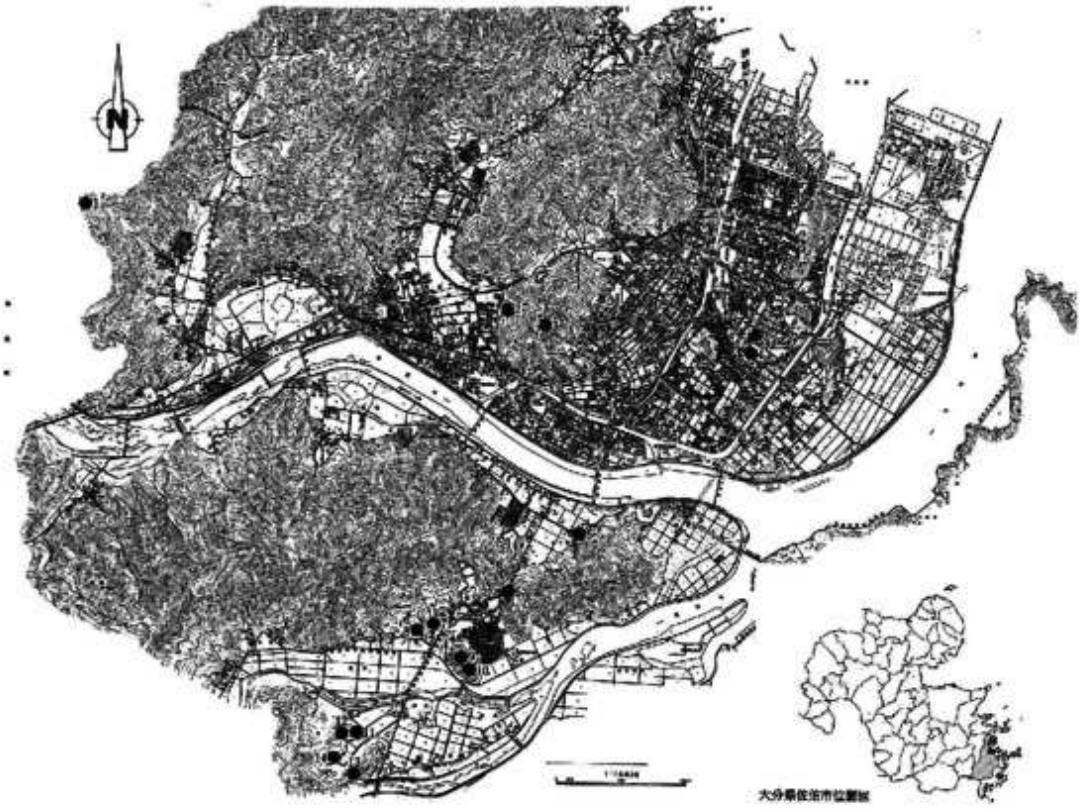
総合運動公園の建設予定地面積は約４８ｈａに及ぶもので、そのうち平成元年度は汐月地区の丘陵部及び水田部内に２６ケ所の試掘調査区画を設定し、遺跡の存在確認を行なった。

その結果、調査区画中８ケ所で遺構を確認し、主に字柿ノ木畑、字柚ノ木元、字平榎地区に遺構・遺物が集中する傾向がみられたので、当３地区・約８，０００㎡を重要地区と判断し、平成元年１０月から本調査するに至った。

なお、はやくから遺跡の存在が指摘されている上ノ台遺跡については、総合運動公園用地の内で現地保存することにした。

2）調査体制

調査主体	佐伯市教育委員会		
調査事務	御手洗　正明	（佐伯市教育委員会社会教育課課長）	
	田嶋　栄治	（　同	課長補佐兼係長）
	山田　健一	（　同	副主幹）
調査担当者	新宅　信久	（佐伯市教育委員会社会教育課調査員）	
調査協力者	後藤　宗俊	（大分県教育庁管理部文化課課長補佐）	
	清水　宗昭	（　同	埋蔵文化財第１係長）
	後藤　一重	（　同	主任）
	綿貫　俊一	（　同	主事）
	佐伯市都市計画課		



第１図　佐伯市所在遺跡分布地図

第１表　佐伯市所在遺跡詳細表

No.	遺　跡　名	所　在　地	時代・種別・主な出土遺物
1	樽牟礼城跡	佐伯市鶴岡～弥生町小田	中世　山城　土師質土器、青磁
2	白潟遺跡	佐伯市鶴望白潟	弥生　貝塚　弥生式中期土器、石包丁
3	鶴屋城遺跡	佐伯市城山	江戸　山城
4	宝剣山古墳	佐伯市渡町	古墳　古墳　剣、短甲
5	岡ノ谷古墳	佐伯市池田岡ノ谷	古墳　古墳　太刀
6	中山砦跡	佐伯市中山	中世　砦
7	下城遺跡Ⅰ	佐伯市長谷下城	縄文　包含地　押型文土器、石器
8	下城遺跡Ⅱ	佐伯市長谷下城	弥生　包含地　土器、鉄器、石器
9	八幡山城跡	佐伯市長谷下城	中世　山城
10	岩清水古墳	佐伯市長谷下城	古墳　古墳　須恵器
11	長良貝塚Ⅰ	佐伯市下堅田長良	縄文　貝塚　押型文土器多数
12	長良貝塚Ⅱ	佐伯市下堅田長良	弥生　貝塚　土器、石器
13	宇山城跡	佐伯市長良宇山	中世　山城
14	汐月遺跡	佐伯市長良汐月	

第II章　遺跡の立地と環境

1）地理的環境

大分県の地形は、豊後水道を挟み遠くは紀伊・四国山地と連なる九州山地を南西に位置して、祖母・傾山系、佩楯山系、阿蘇・九重連山の壮大な山並みを有する。この山々の急峻な渓谷に大野川・大分川・山国川・番匠川といった一級河川は、水源を発している。また、大分の地勢は、北部の耶馬渓開析溶岩台地を主とする溶岩性台地、中部の九州連見火山群・九重高原・阿蘇外輪山系等の火山性の台地と高原が展開し、そして南部の佩楯山・傾山等の脈状山地に大別できる。佐伯市は、大分県最南部の都市であり南部特有の脈状山地を後背として、臼杵・八代線の大断層崖直上にある尺間山や椿山等は、外帯特有の壮年期の山相を呈し、地質は、祖母山等を中心とする秩父系の古生層と、四国の四万十川層群とに分かれ、前者は石灰岩性、後者は砂岩、頁岩、粘板岩を主とする。四万十中生層はさらに地質構造上、番匠帯、堅田帯、浦代帯、蒲江帯の四つに分かれ、遺跡の所在する地域は堅田帯に含まれる。この中生層は、時代未詳中生層と呼ばれ化石を全く含んでおらず、主に新白亜系に属すると思われるが定かではない。

沿岸部に至っては、豊後水道に臨んで複雑で景観豊かなリアス式海岸であり漁場として格好のフィールドとなっており、佐伯港は県内屈指の良港としてその名を轟かせている。佐伯の中心部を流れる番匠川は佩楯山系に水源をもち、支流最大の堅田川と合流して狭小ながら沖積平野を形成している。この中・下流域の沖積地に市街地が発達し、賑わいがある都市として今日に至っている。

2）歴史的環境

佐伯地方において過去、本格的な調査がなされた遺跡は稀薄である。しかし、調査された遺跡はいずれも大分県の中で貴重かつ重要な遺跡が多い。時代の古い順に取り上げるとまず後期旧石器時代の聖嶽洞穴がある。化石人骨とともに後期旧石器の台形様石器・細石核などを出土し縄文時代への過渡期を研究する上で大きな成果をあげている。番匠川本流と久留須川との三角地帯には、遺跡が集中している。八匹原、宮野、道越、下口、上の原、千又、亀の甲、カサノ原等が確認され、縄文早期の押型文、撚糸文（一部）を伴出し佐伯における文化の幕開けが、この番匠川水系を起点として発している。

また番匠川支流の堅田川流域にも下城遺跡（下層）、長良遺跡（下層）等の、早期の押型文土器・チャート製石器を包含する遺跡が過去調査されている。

その他、縄文時代においては、白潟遺跡（B地点）において後期土器片が発見されているに過ぎず、この空白域を埋める資料の提供が今後の課題である。

弥生時代に入ると、下城遺跡において、前期末～中期の東九州の指標となる「下城式土器」が発見されている。この下城式土器は刻目突帯文を有し、現在、この時期の発掘において大分県では少なからずこの土器を伴出している。この遺跡は、昭和23年に二度調査され、カキ、ハマグリを主とする貝層で、一部、イノシシ・シカ等の獣骨類もある事が分かっている。その他には、住居址・製鉄工房址が検出され、賀川光夫氏は「この貝塚を伴う集落形態は、弥生文化の中における縄文的採集の存続を意味する。[註1]」と語っている。この集落形態は、長良・白潟遺跡も同様であり、佐伯地方における弥生中期の一つの形態をなすものではないかと思われる。古墳時代に関する報告例が皆無に等しい為、全体を把握する事は難しいが、その中で、東島古墳・宝剣山古墳が報告されている。[註2] 宝剣山古墳は内部より短甲を出土している。時期は、5世紀末の築造と考えられ、箱式石棺をもつ古墳である。（新宅信久）

古代から中世にかけての佐伯地方の概況

豊後国風土記によると、古代の海部郡は郷里制に基づいて「郷四所・里一十二・駅一所・烽二所」からなる行政組織がしかれており、このうち佐伯地方を含む穂門郷は、景行天皇の御事蹟として最勝海藻採りの説話とともに紹介されている。そして、豊後水道にのぞむ海部郡一帯の住民はほとんどが海辺の白水郎（あま）、つまり海人族（漁民）であったことがうかがわれる。彼らは部民「海部」として設定された職業的地域集団であって、鰒や鰹などの海産を大和朝廷に貢納する負担義務を負い、同時に三韓出兵の例にみられるように、早くから航海術にたけていたため、水軍の主力となって働いたのである。この豊後「海部」を従来統率していたのが海部の直であり、豊後国海部郡司として初めて「続日本紀」に登場する海部公常山は、海部の直と同族の大領主であったとされる。朝廷は、延暦4年（785）常山の撫民治績を評価して外従五位下を授け、改めて大領に任じている。

平安時代の貴族の日記である「本朝世紀」天慶4年（941）条に、藤原純友は南海の賊を糾合して反乱をおこし、純友の次将であった佐伯是本が「佐伯院」を襲ったとの記事がある。「佐伯院」とは、奈良時代後半から平安時代にかけて郡大領（郡家）に管理されていた官倉・倉院にちなむ地名であると思われるが、とにかく「佐伯」という地名がはじめて史料によって確認されている。その後、荘園制社会の進展とともに「佐伯院」は発展的に解消して荘園化し、穂門郷はやがて「佐伯荘」に編入されていく。平安末期から源平時代にかけて、佐伯地方の荘園支配者として武士化した大神姓佐伯一族は、佐伯三郎惟康（一に惟倩）をその初代とし、かの勇名を馳せた緒方三郎惟栄の孫または従兄弟にあたるという。佐伯氏は惟栄の遺領を継承して荘内の実権を握り、佐伯荘の地頭（領主）として文禄2年（1593）の大友氏改易まで約四百年

間、十四代にわたって栄えた。中世・領国支配の拠点となる栂牟礼城が史料に登場するのは十代佐伯惟治の代からであるが、これ以前の佐伯氏本流・庶流の本拠地について、「豊後国図田帳」にみえる本荘百二十町は、鎌倉時代造立とされる十三重塔のある古市地区が、また庶流の支配した堅田村六十町は、宇山城・高城・八幡山城との関係や14世紀末から15世紀にかけての文化財の分布状況、さらには水利的条件からみて長谷一帯が、それぞれ有力候補地として推定されている。[註3]

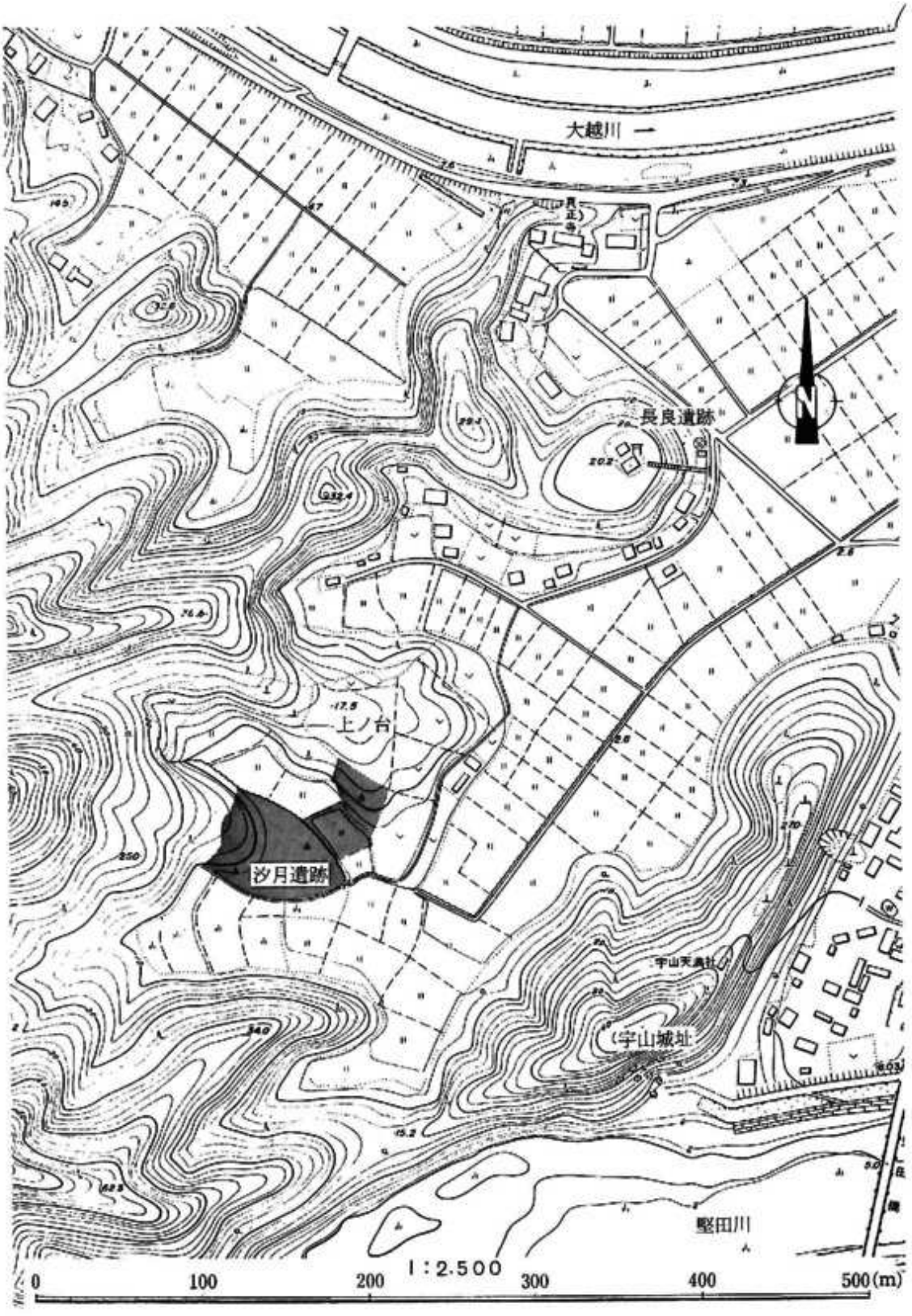
（山田健一）

註(1)賀川光夫　「下城式土器を出土する遺跡」『佐伯市史』　佐伯市教育委員会　1974

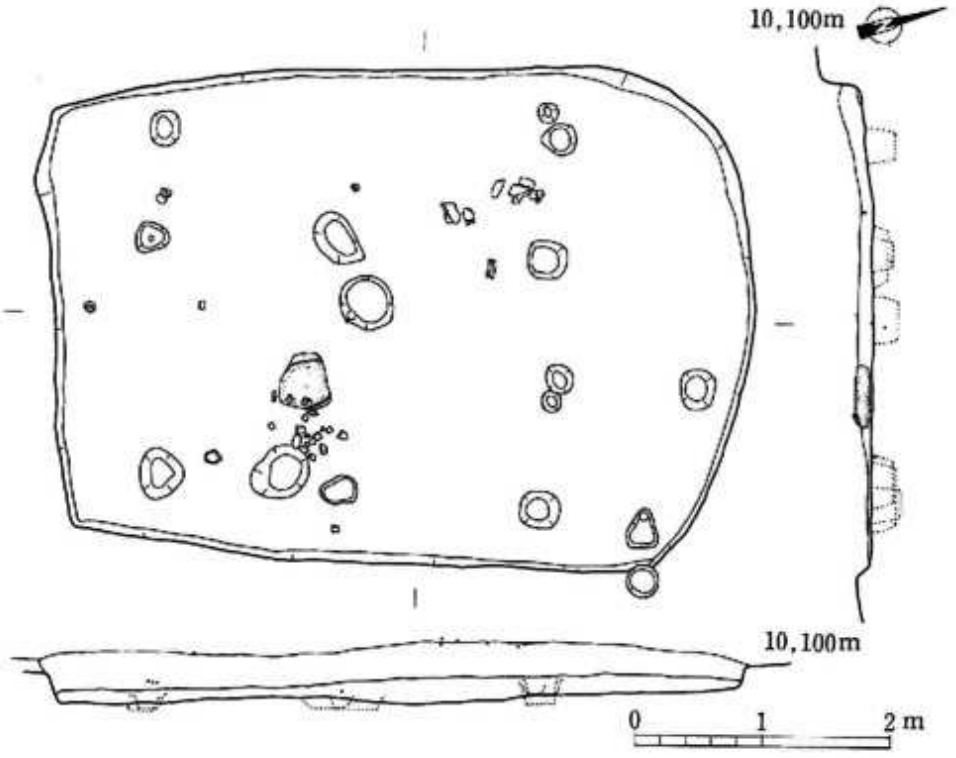
註(2)清水宗昭他　『宝剣山古墳』　佐伯市教育委員会　1979

註(3)橋本操六　『佐伯氏一族の興亡』　佐伯市教育委員会　1989

汐月遺跡　柿ノ木畑調査区全景（航空撮影）



第2図　汐月遺跡位置図と周辺地形図

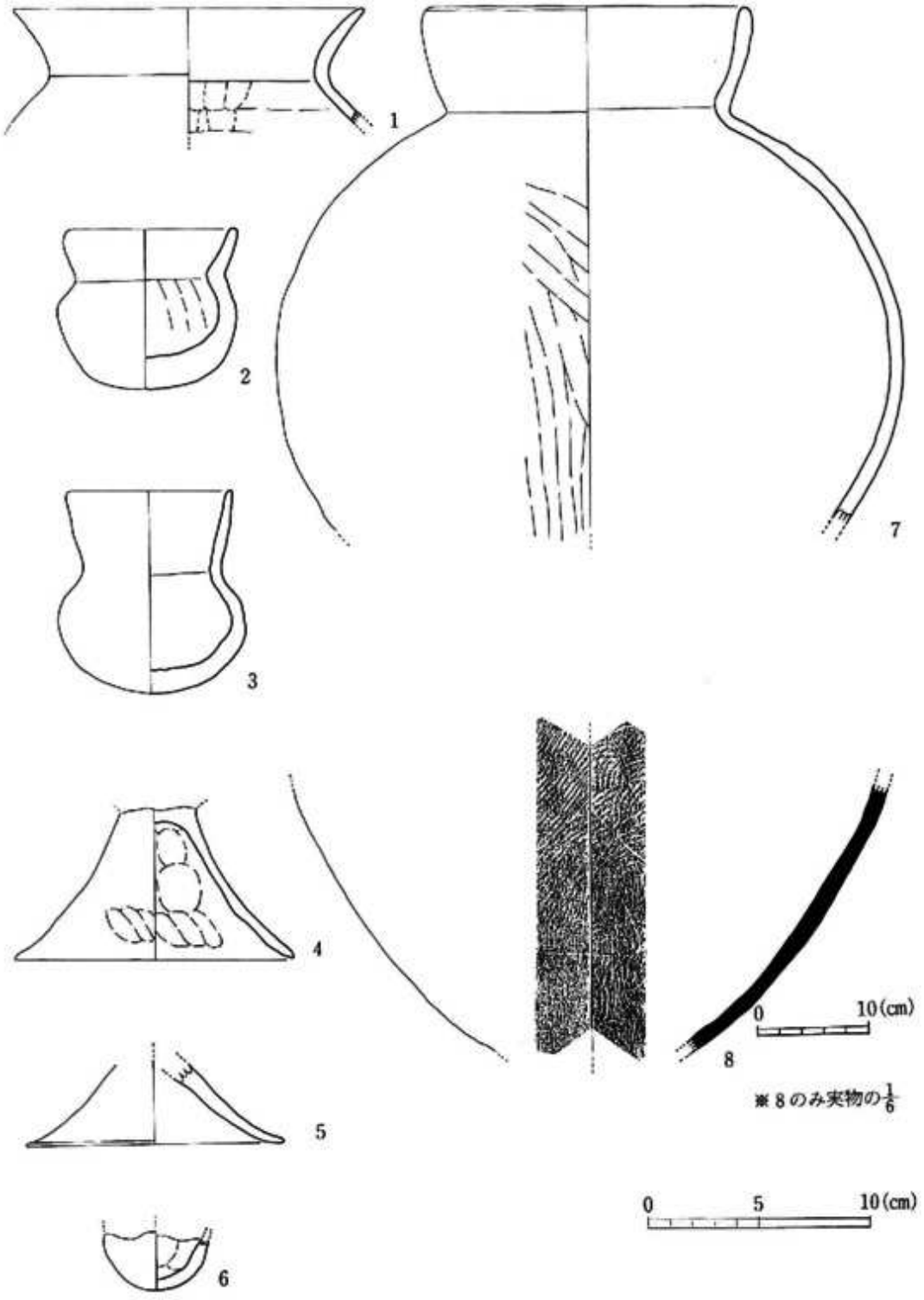


第4図　1号遺構実測図

1号遺構出土遺物

1号遺構からは甕、壺、高坏、ミニチュア土器、須恵器甕等が出土した。

1は甕である。1は口縁部でくの字に屈曲し大きく外反する。磨滅が著しい。2・3・7は壺である。2は小型丸底壺で立ち上がりが低く体部は扁球形をなす。3も小型丸底壺で口縁がやや長く伸び外反気味に立ち上がる。体部は扁球形をなし、内面底部にはヘラ描きによる粗いカキ目が不規則に施される。7は胴部最大径に比べて口縁が小さい。外面はヘラ削りが下半から上半に向かって顕著に施される。4・5は高坏である。4は高坏脚部で裾部に向かってハの字状に開く。薄手で丁寧な作りである。5は高坏脚裾部でハの字状に大きく開く。6はミニチュア土器体部で卵球形を呈し、内面は丁寧なナデを施す。8は須恵器甕の体部下半で外面には平行タタキ、内面には同心円文のタタキ後擦り消しが認められる。1号遺構は、小型丸底壺、高坏等から5世紀中頃〜後半に位置づけられる。須恵器以外の遺物に関してはほとんど床面に着く状態で検出されたが、須恵器については埋土の上部で検出されており、この住居に直接関連するものではないと考えられる。



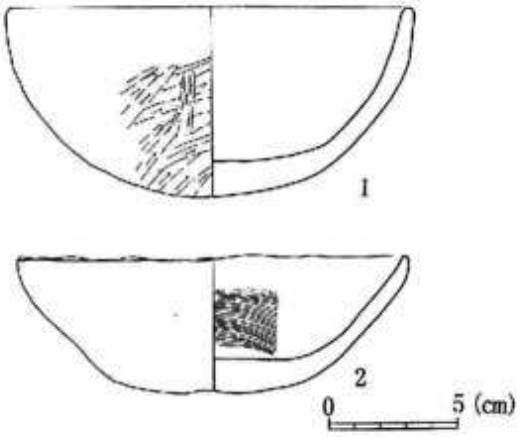
第5図　1号遺構出土遺物実測図

第2表　1号遺構出土遺物観察表

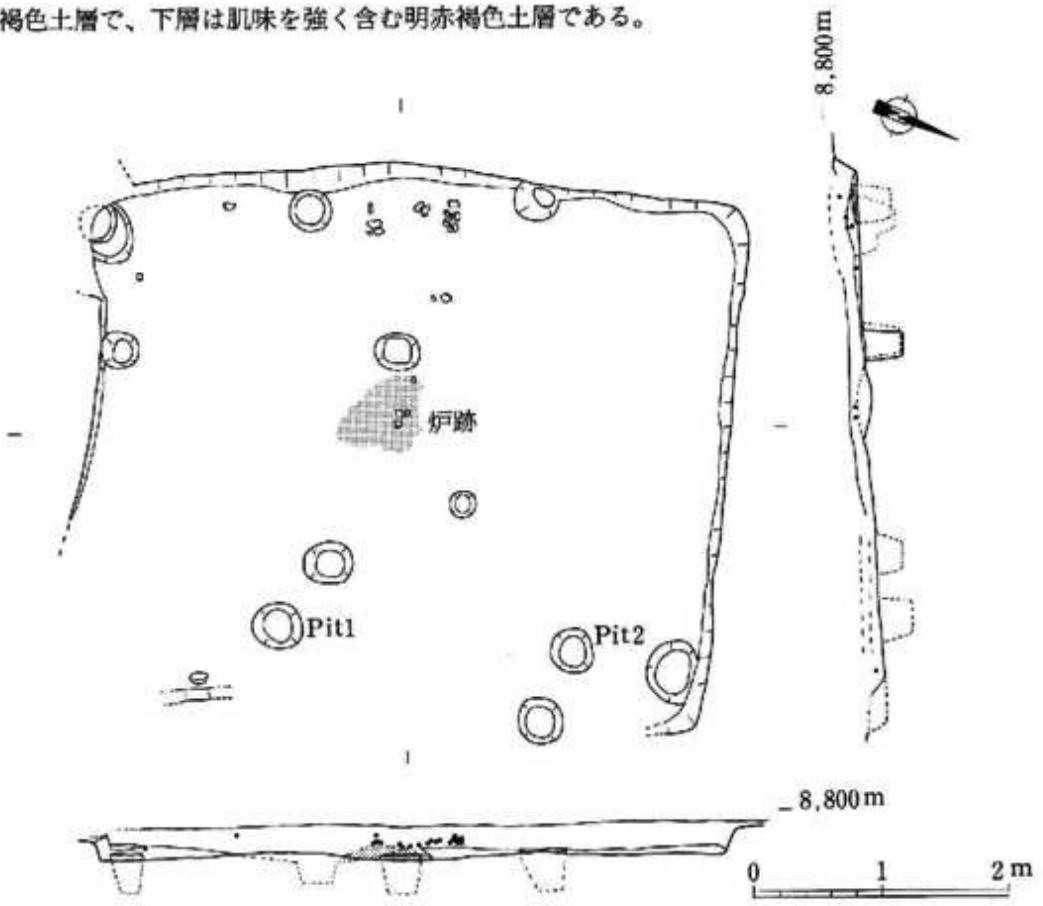
番号	器種	法量	器形の特徴	成形の特徴	胎土・色調	備考
1－1	甕	口径 15.8cm	内面に明瞭な稜をもってくの字に屈曲し、中程で肥厚し、先端部はしまりながら外反する。	外面口縁部ナデ、体部は不明、内面口縁より稜のつく辺りまでナデ、それより下半はヘラ削り	軟質、もろい 角セン石、長石、石英 内外面とも淡黄褐色	風化が著しい。
1－2	壺	口径 7.1cm 器高 7.4cm	小型丸底壺、全体に器壁が厚く、体部は押し縮まった鞠球形で口縁部は、頸部よりやや外反気味に立ち上がる	外面ナデ 内面ナデアゲ	堅緻、角セン石、斜長石 (外)明褐色 (内)灰褐色	頸部下、スス付着
1－3	壺	口径 7.5cm 器高 9.3cm	小型丸底壺、底部は厚く、口縁に向い、やや薄手になる体部は鞠球形で内面底部にヘラ描きによる荒いカキ目が無雑作に入る	外面ナデ 内面ナデ 内面底部ヘラ描きによる荒いハケ目	堅緻、斜長石、1cm程度の小礫 (外)黄褐色 (内)淡赤褐色	底部から胴部にかけてスス付着
1－4	高坏	底形 12.7cm 残存高 6.4cm	高坏の脚部で薄手でゆるやかに裾部に向かって八の字状に開き、内面は稜をもつ	外面巻きナデアゲ後丁寧なヨコナデ 内面陵より上部はオサエ、陵より裾部に向いナデ	やや堅緻 角セン石、斜長石、長石 (外)明褐色 (内)明褐色	内面に粘土塊が若干付着
1－5	高坏	底径 11.8cm	高坏の脚裾部で八の字状に開き稜はもたない	外面ナデ 内面オサエ後ナデ	やや軟質、精緻 斜長石、赤色粒、白色粒、長石 (外)黄褐色 (内)淡黄褐色	
1－6	ミニチュア	残存高 2.8cm	薄手で卵球形をなす	外面ナデ 内面ナデアゲ後ヨコナデ	軟質、もろい 斜長石、白粒 (外)白褐色 (内)白褐色	
1－7	壺	口径 14.0cm	球形に近い体部から直立気味に口縁が立ち、端部は、平坦に収まる。	外面ヘラ削り 内面磨滅不明	堅緻、斜長石、白粒 (外)白褐色 (内)白褐色	スス付着
1－8	甕		須恵器甕の体部下半で器壁が厚い。	外面平行タタキ 内面同心円文タタキ後一部雑いスリ消し	堅、精緻、白粒 (外)白灰色 (内)白灰色	かなり磨滅している

2）2号遺構

竪穴式住居址である。1号遺構に隣接する形で、やはり標高9.5m～10mの位置に存在する。長軸方位N－22°－Wにとり、1号住居址に直交する。南西隅部を耕作機械による攪乱によって失っており、確認出来る範囲で長軸5m、短軸約4mになるものと思われ、規模的には1号住居と変わらず、住居形態は方形を呈する。主柱穴は、Pit1・Pit2を含む4本柱と推測して検出作業を行ったが、検出を見なかった。内部施設については、中央部に炉をもつ。約6cm程度掘り込まれた皿状の地床炉で土層観察すると2層に分かれ、上層は炭を含む黒黄褐色土層で、下層は肌味を強く含む明赤褐色土層である。



第6図　2号遺構出土遺物実測図



第7図　2号遺構実測図

2号遺構出土遺物

1・2とも鉢である。1はやや深めで丸底を呈する。外面はヘラ削りが施される。2は平底から大きく外に向かって立ち上がり端部近くでやや内湾する。内面は横のハケ目が施され端部はナデ調整を行っている。以上、明確な特徴を有する遺物を伴ってはいないが1号遺構との時期関係を考えると5世紀後半～6世紀初頭に位置づけられると思われる。

第3表　2号遺構出土遺物観察表

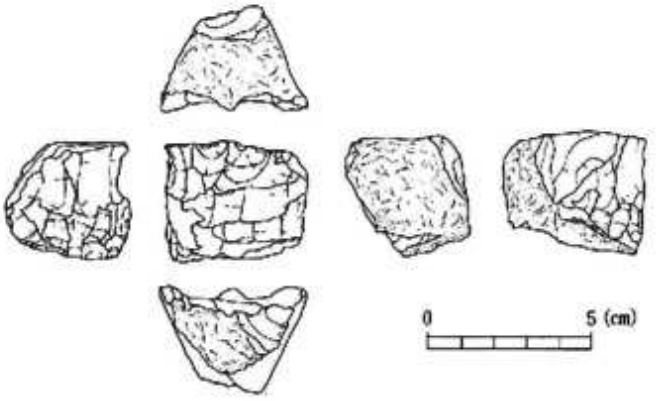
番　号	器種	法　量	器形の特徴	成形の特徴	胎土・色調	備　考
2－1	鉢	口　径 15.5cm	口縁が内湾気味に直立する。底部から口縁にかけて器壁が厚い	外面口縁部ナデ 体部はヘラ削り 内面オサエ後ナデ	やや軟質 斜長石、赤色粒 (外)淡褐色 (内)暗赤褐色	内面コゲ付着
2－2	鉢	口　径 15.2cm 器　高 5.2cm	底部は厚く、外へ開き気味に立ち上がり、口縁部は少し内湾する	外面ナデ 内面ハケ後ナデスリ消す	やや堅、斜長石、角閃石、小礫(2.3mm大)、赤色粒 (外)明赤褐色 (内)灰褐色	

3）3号遺構

調査区中央北東部に位置し、柚ノ木元地区の水田へ接する斜面に差しかかる場所に位置する。北西部分を若干耕作により攪乱を受けているものの、形態的には不定形な楕円を呈している。規模は、最大幅5.6m、検出面より最大深1.0mを測り、浅い舟底形をなす。遺物は、流れ込みによると思われる堆積状況が見受けられる。

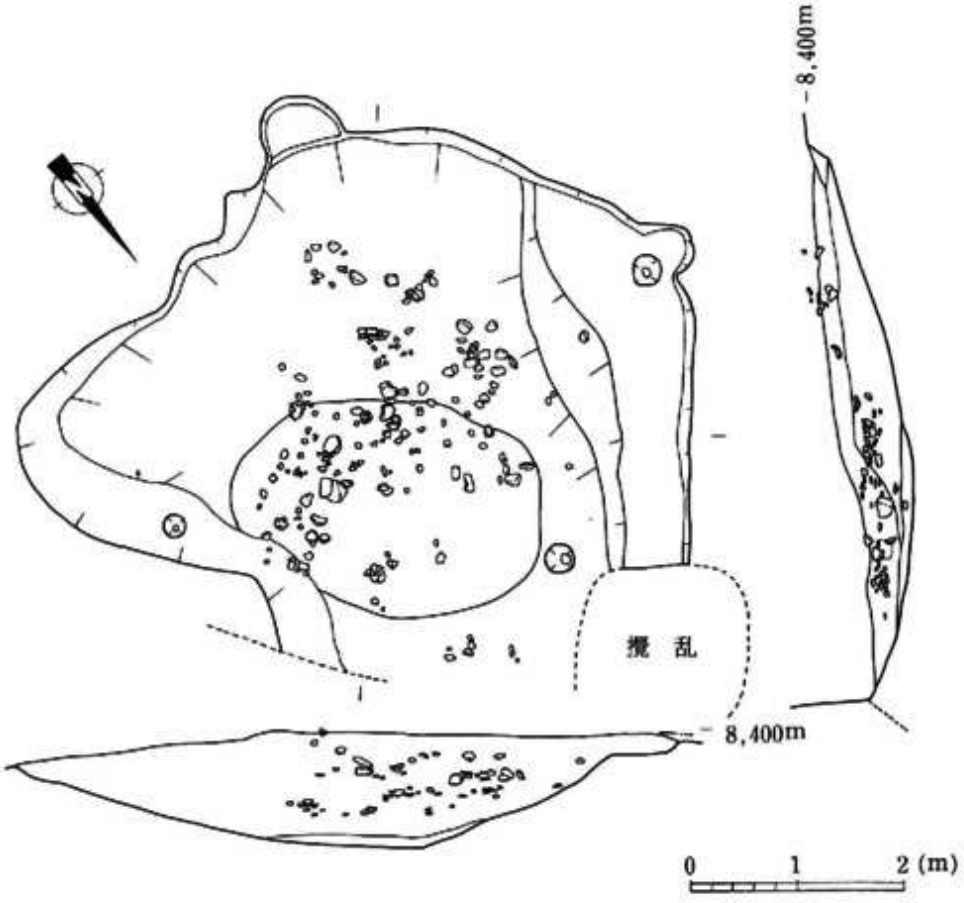
3号遺構出土遺物

3号遺構は縄文早期と見られる石核が1点、その他の出土遺物は大きく2時期に分けられる。1は石核である。石材はチャート製で打面転位をしながら長幅比1：1と2：1で剥片を剥離している。2，3は壺である。2は複合口縁壺で立ち上がりがやや長く、頸部下に刻みを有するベルト状突帯を付す。3はやや小振りの壺で頸部はくの字に外反する。4は高坏の坏部で屈曲部が比較的明瞭で、屈曲部より口縁に向かいやや内湾しつつ長く立ち上がる。5～8までは甕であ

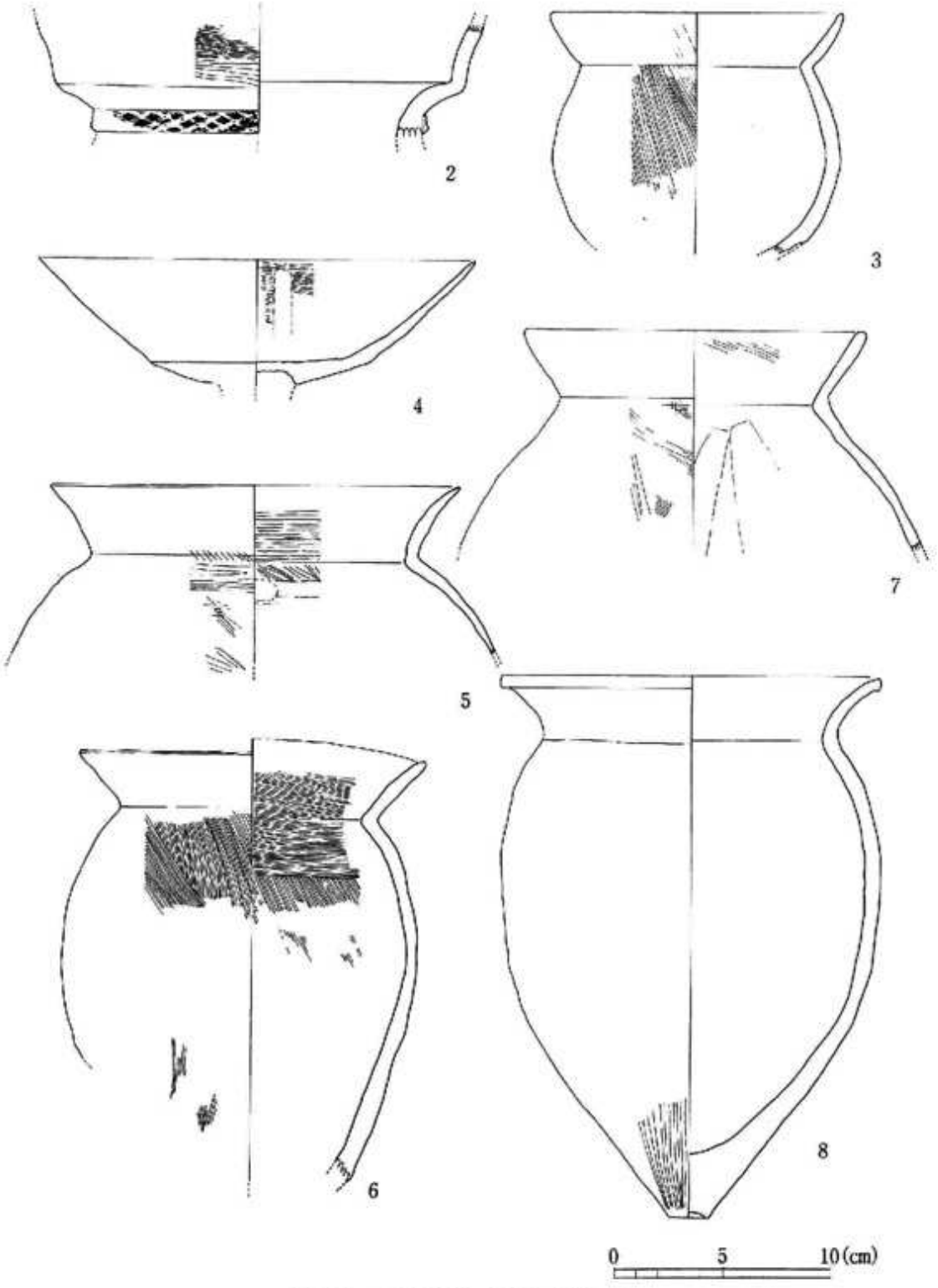


第8図　3号遺構出土遺物実測図(1)

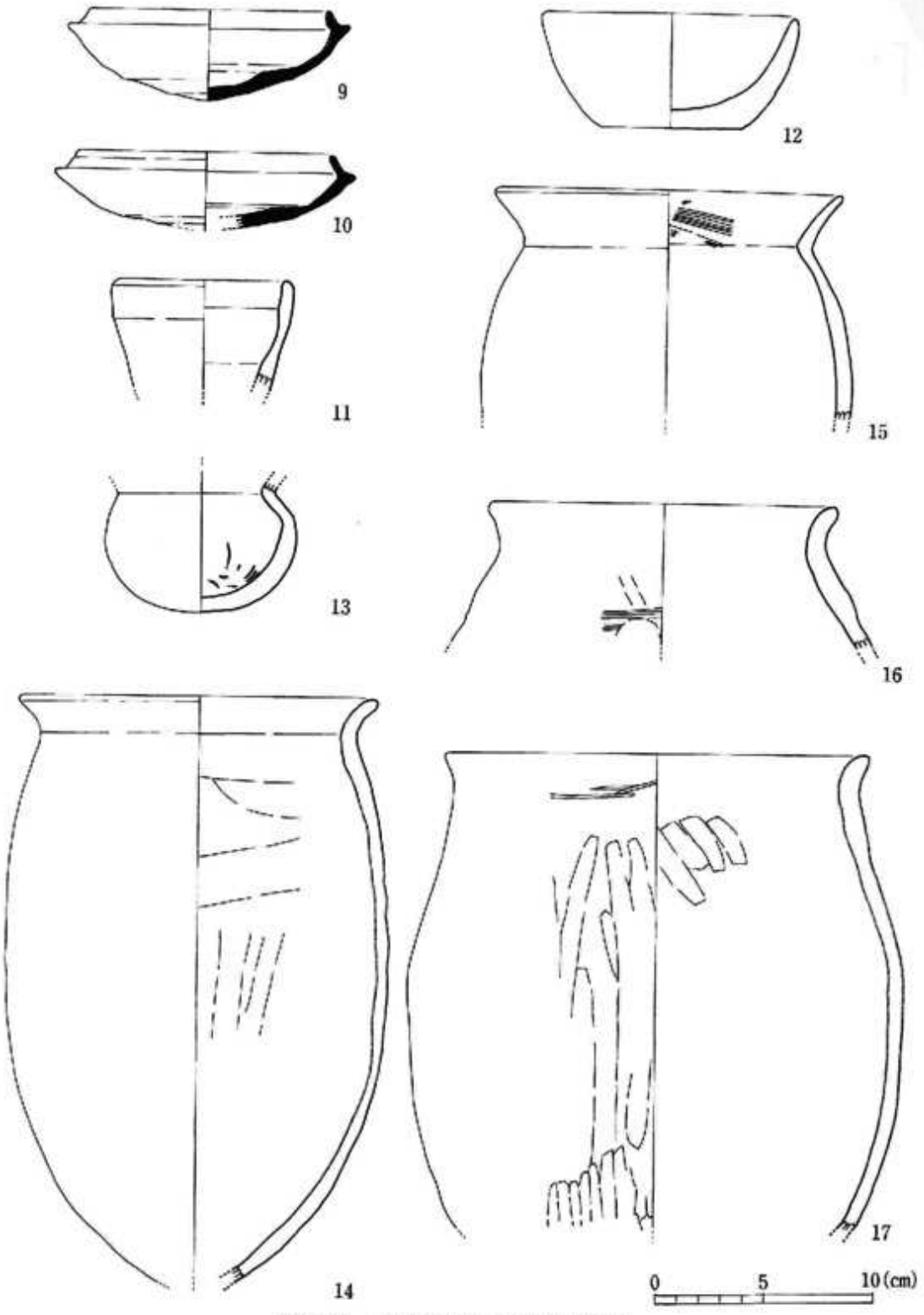
る。5はくの字に屈曲し、壁厚が薄い。6はくの字に外反して口縁はかなり歪んでいる。内外面ともにハケ目を有する。7は口唇部が上を向いて面をなす。内面にはヘラ削りを施こす。8はくの字に屈曲し口唇部は外に向かって面をなし、器形は口縁と胴部径がほぼ一緒で底部は尖底状の平底で内面に指頭圧による凹みが認められる。9～11までは須恵器である。9，10は坏身である。11は提瓶もしくはそれに類する口縁部である。12は鉢で平底を有し器壁が厚い。13，14は壺である。13は小型丸底壺で内面はヘラ状工具によるカキ目が見られる。14は長胴壺で口径と胴部径がほぼ等しく、内面にヘラ削りが施される。15～17は甕である。15はくの字に屈曲し内外面に明瞭な稜をもつ。16，17は屈曲部に稜を持たず緩やかに外反し、17は内外面ともにヘラ削りが施される。18，19は甑で、18は接合はされてないもののそれぞれ同一個体と思われ、底は全孔である。底部より1.5cm上に器壁に対して平行に円孔が見られる。内外面ともに上方向へ顕著なヘラ削りが施される。19は遺物自体の磨滅が著しく、輪積み痕ごとに遺物破砕が見られる。以上、3号遺構は2～8までが弥生時代終末～5世紀前半前後と9～19までは6世紀末に位置づけられる。



第9図　3号遺構実測図



第10図　3号遺構出土遺物実測図(2)



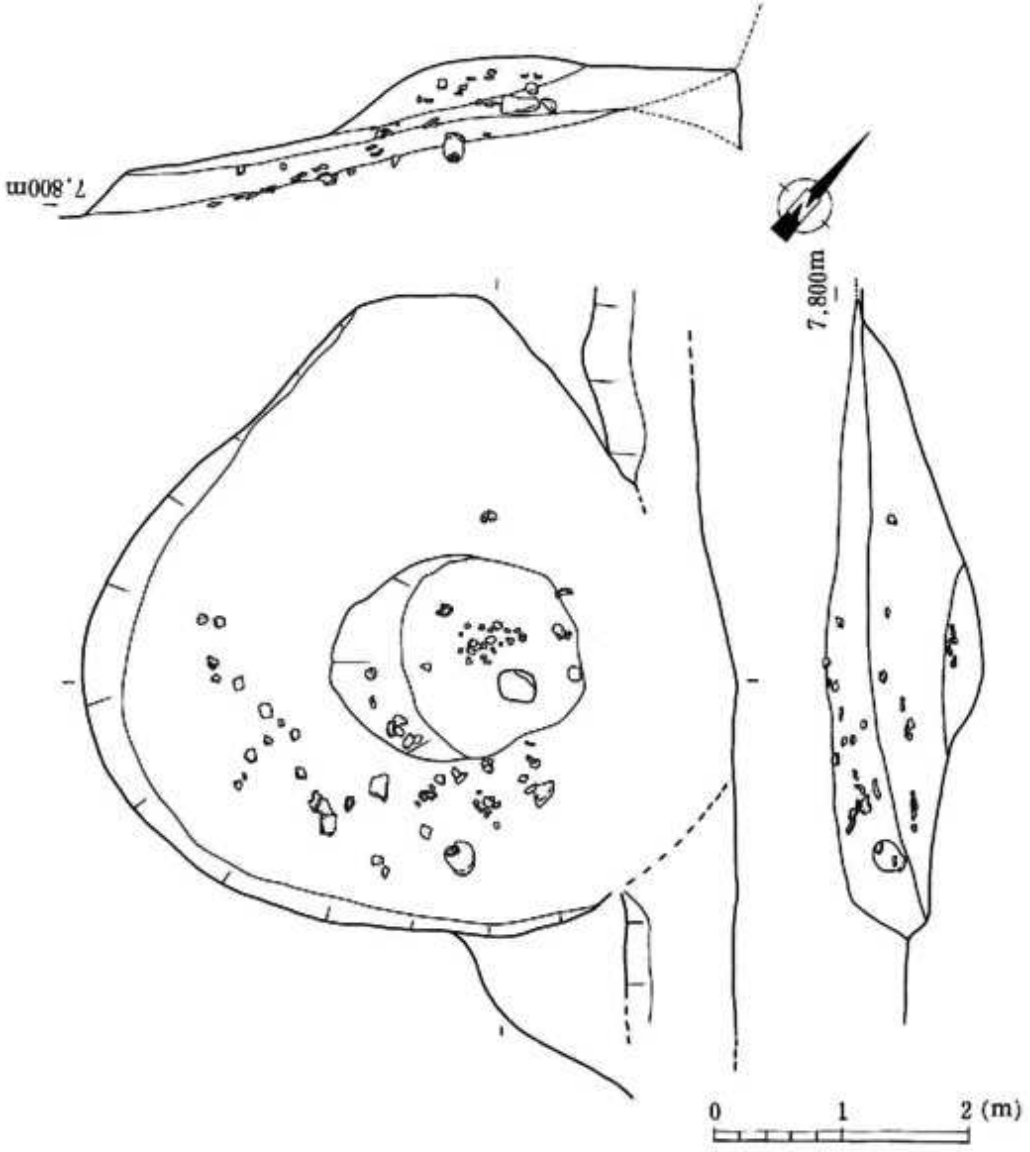
第11図　3号遺構出土遺物実測図(3)

第5表　3号遺構出土遺物観察表 (2)

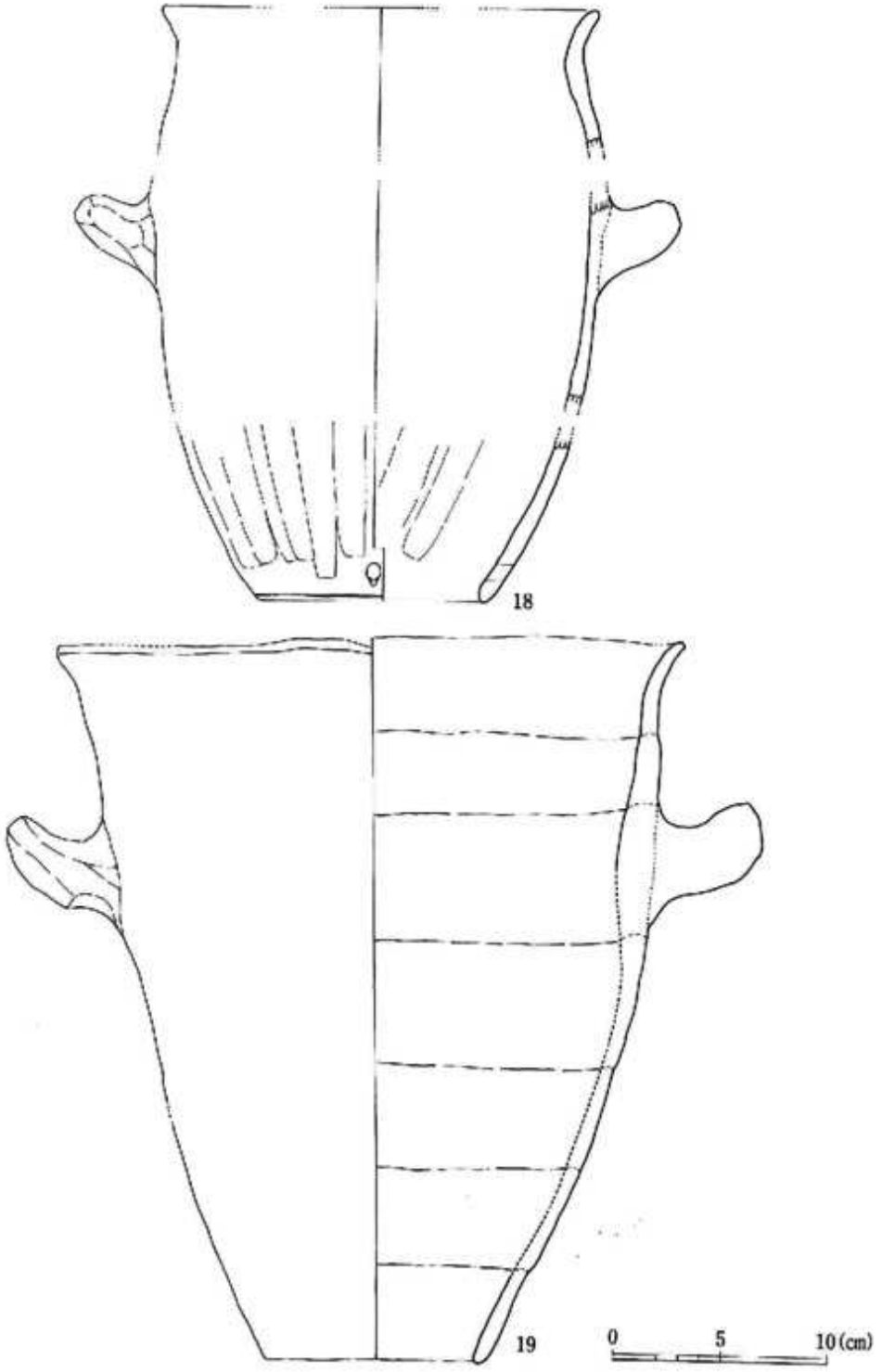
番号	器種	法量	器形の特徴	成形の特徴	胎土・色調	備考
3－12	鉢	口径 11.6cm 器高 5.3cm	底部は厚く、外へ開き気味に立ち上がるがやや内湾する。器壁は全体に厚い。口縁部は丸く収まる	内外面ともナデ	堅緻、良好 角閃石、砂粒 (外)黄褐色 (内)黄褐色	黒ハンあり
3－13	壺		小型丸底壺の胴部で扁球形を呈する。	外面ヨコナデ 内面荒いヘラ削り後ナデ	堅緻、良好 角閃石 (外)黄褐色 (内)淡黄褐色	外面底部黒ハンあり
3－14	壺	口径 16.4cm	長胴壺で、口径と胴径の比率がほぼ同じ。全体にスマートで器壁の厚さもほぼ同じである。	外面ナデ、オサエ後ナデ 内面ヨコ、タテへのヘラ削り	堅緻、良好 石英、角閃石 (外)茶褐色 (内)茶褐色	外面スス付着
3－15	甕	口径 15.9cm	頸部はややくの字に屈曲し、口辺部に稜を持つ。	外面ヨコナデハケ目（不明瞭） 内面ヨコハケ目、ナデ	良好 石英、角閃石、赤色粒、白色粒 (外)暗茶褐色 (内)白灰褐色	外面スス付着
3－16	甕	口径 16.0cm	短い口縁が外反しながら立ち上がる	外面ナデ、ハケ目 内面ナデ	堅緻、良好 石英、小石（1㎜～9㎜大程度）赤色粒 (外)赤灰褐色 (内)赤灰褐色	
3－17	甕	口径 19.6cm	口縁部は緩やかに外反する。	外面タテ方向へヘラ削り、立ち上がり部分に一部ヘラによる沈線 内面ナデ、タテへのヘラ削り	堅緻、良好 石英、角閃石 斜長石2㎜～4㎜大の灰黒色粒、 (外)茶褐色 (内)茶褐色	外面スス付着
3－18	甑		それぞれ同一個体と思われる。口縁部は緩やかに外反する。底は前孔で残存片の中に底部横からの円形の平行孔が認められる。底部内面に稜をもつ。	外面口縁部ヨコナデ体部タテのヘラ削り、把手、不整ナデ 内面口縁部ナデ、体部タテへのヘラ削り	堅緻、角閃石、長石 (外)黒灰色 (内)淡黄褐色	
3－19	甑	口径 28.9cm 器高 33.8cm	口縁部はやや外反し、口辺部は外に向かって面をなし、稜をもつ。底は前孔である。輪積痕ごとの遺物破砕が顕著である。	内外面とも磨滅が著しい	軟質、もろい 長石、小石（5㎜大程度）、白色粒、赤色粒、 (外)明褐色 (内)灰褐色	

4）4号遺構

3号遺構に隣接し、調査区中央北東部に位置する。柚ノ木元調査区との境に狭幅ではあるが農道が走っており、これによって北側の一部を切られている。規模は5m×5.1mで円形に近い楕円を呈し、最大深1.2mを測る。遺物は流れ込みによるものと思われ、床面よりやや浮いた状態で検出された。



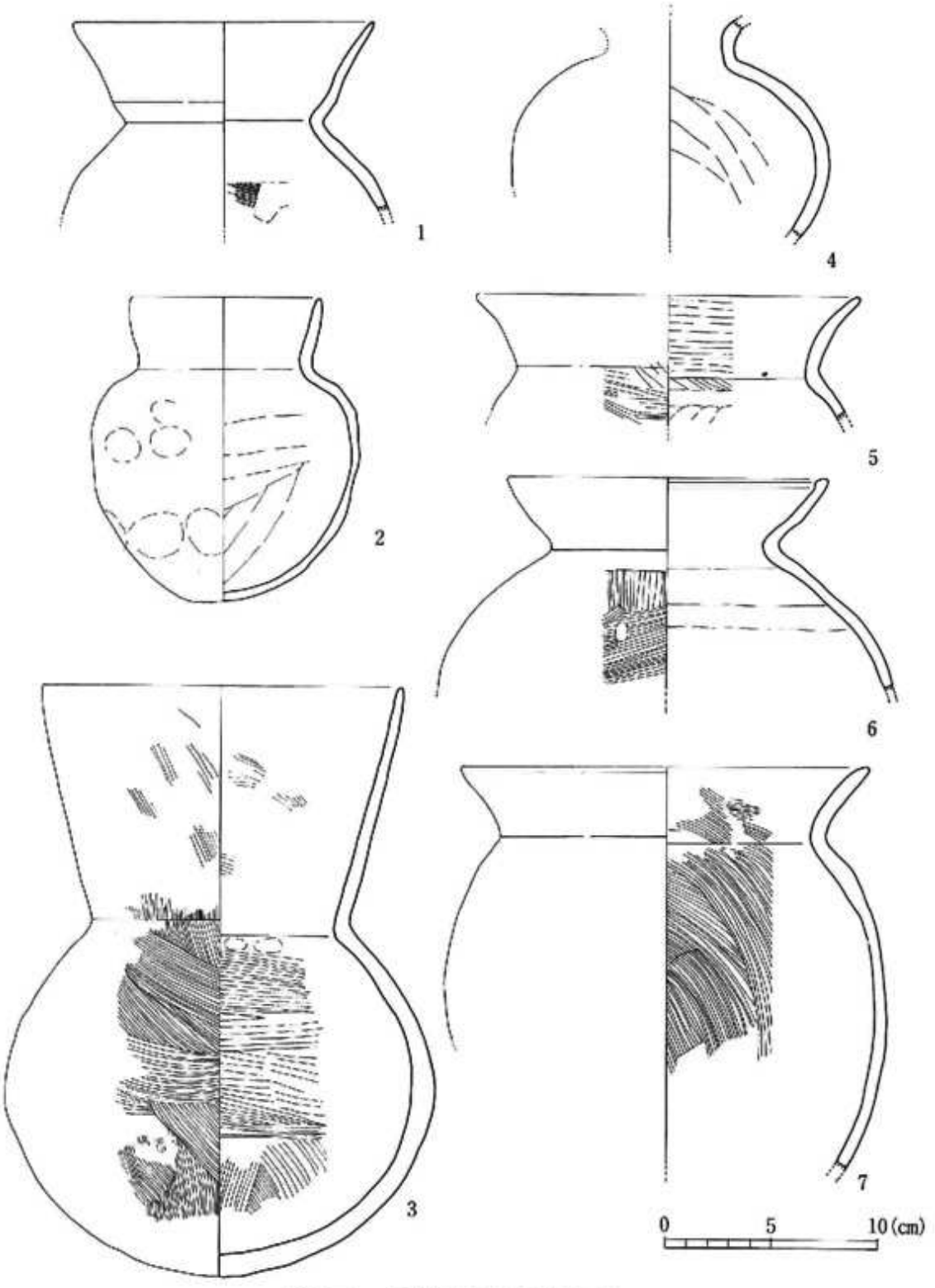
第13図　4号遺構実測図



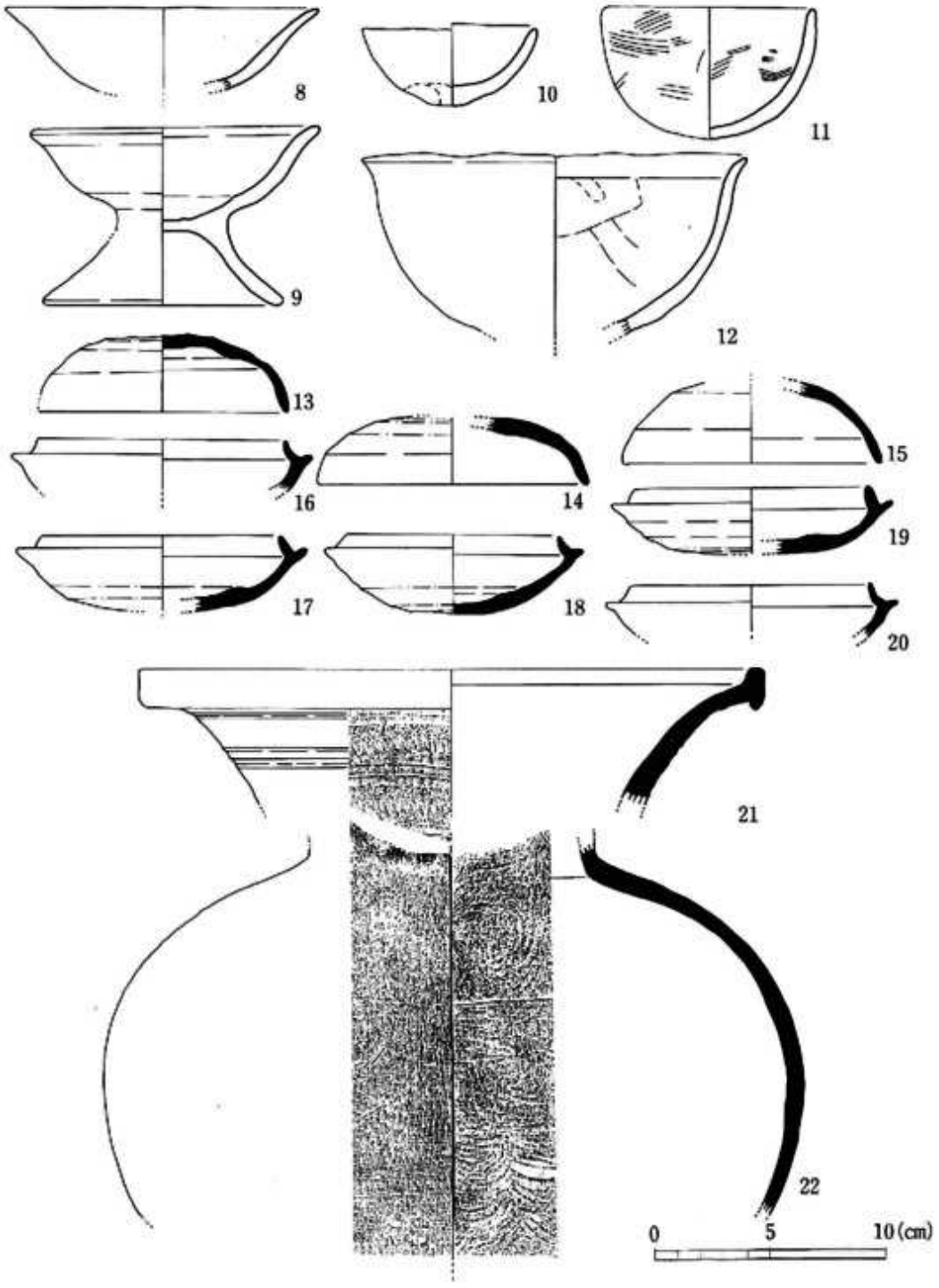
第12図　3号遺構出土遺物実測図(4)

第4表　3号遺構出土遺物観察表 (1)

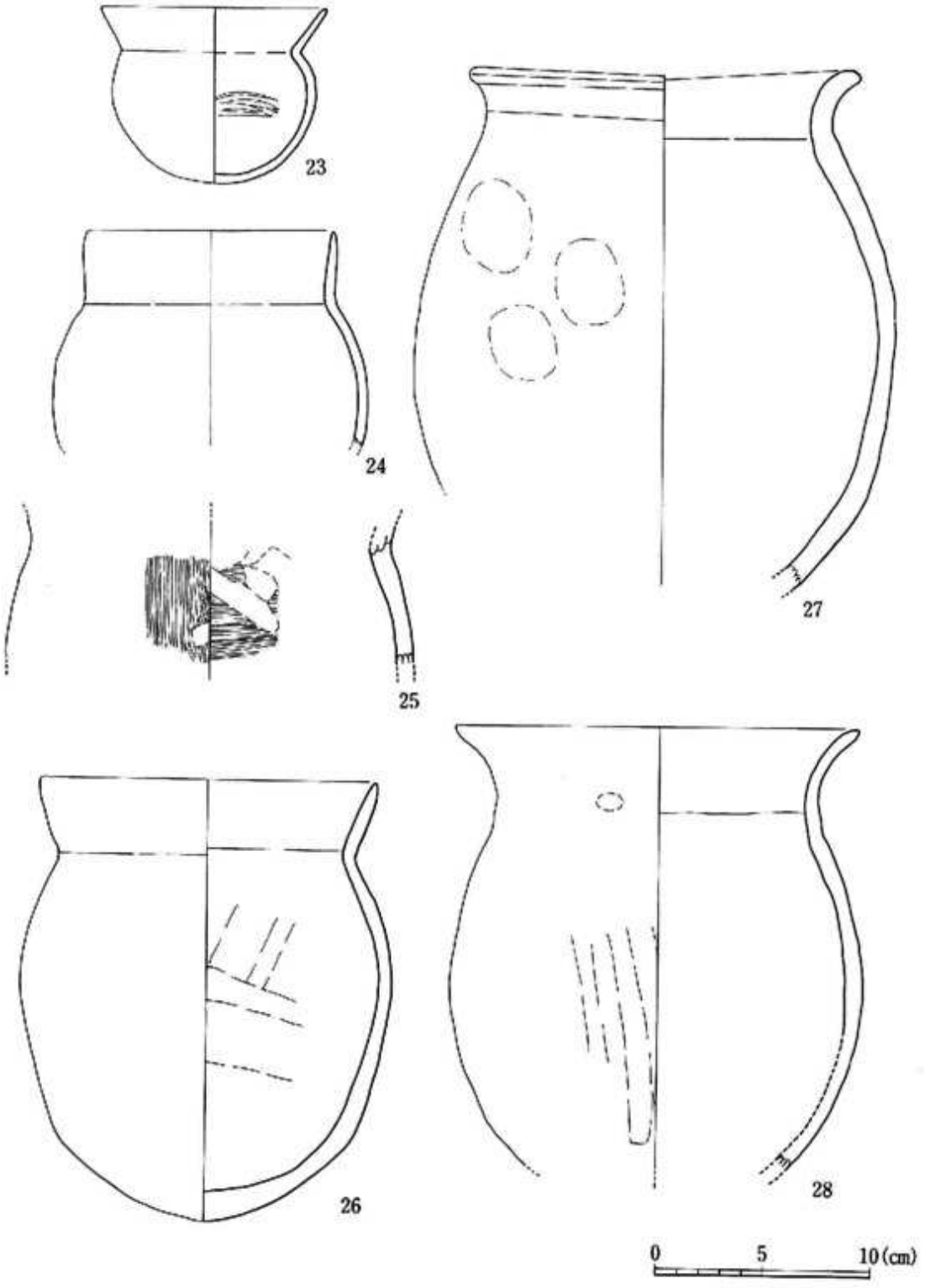
番号	器種	法量	器形の特徴	成形の特徴	胎土・色調	備考
3－2	壺		二重口縁壺の頸部で口尊部を欠失している。キザミ目の突帯を貼り付けている。頸部より大きく外反し、やや直立気味に立ち上がる。	口縁部外面ヨコへのハケ目 内面ヨコナデ	堅緻、良好 角閃石、金雲母、白色粒 (外)白黄色 (内)白黄色	
3－3	壺	口径 13.4cm	やや小さめの壺で頸部内外面に稜をもつ。 口縁は短く外反し、底部は丸底になると思われる。口径と胴径がほぼ等しい。	外面タテへのハケ目 内面ナデ	良好、 石英、小石（1mm～3mm大程度） (外)茶褐色 (内)黒灰褐色	
3－4	高坏	口径 20.4cm	高坏の坏部で脚部を欠く。外面の口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は、緩やかに内湾しながら立ち上がる。	内外面ともややミガキ 内面細かいハケ後一部ナデアゲ	堅緻、良好 長石、小石（2mm大程度） (外)白褐色 (内)白褐色	
3－5	甕	口径 18.8cm	頸部はくの字に屈曲し口縁部がするどくなる。 屈曲部壁厚に対して胴部壁厚はなかり薄くなる。	外面ハケ目 内面ハケ一部にヘラ削りを有するが磨滅している。	もろい、斜長石、赤色粒 (外)白褐色 (内)白褐色	
3－6	甕	口径 16.2cm	頸部はくの字に屈曲し口縁部は丸くなる。やや口縁が開んでいる。	内外面とも細かいハケ目	やや良好 2mm～3mm大の茶赤色粒 (外)茶褐色 (内)茶褐色	部分的にス付着。
3－7	甕	口径 15.8cm	頸部よりくの字に開き内外に稜をもつ。口縁はやや内湾し、端部は平たく収まる。	外面ハケ後ナデ 内面口縁部ハケ後ナデ、体部ヘラ削り	堅緻、良好 長石、白色粒 (外)白褐色 (内)白褐色	
3－8	甕	口径 17.6cm 器高 25.4cm	頸部は緩やかに外反し端部は外に向け、面をなす。胴径と口径は、ほぼ同じで胴部はややスマートに伸び、底部は尖底状平底をなす。	外面磨滅 底部付近タテ方向へハケ目 内面ナデ	軟質、もろい 小礫（2mm～10mm大程度） 斜長石、白色粒 (外)明燈褐色 (内)暗赤褐色	外面　ス付着 内面　コゲ付着。
3－9	坏身	口径 11.0cm 受部径 13.2cm 器高 4.2cm	立ち上がりは内傾して中程より直立気味にやや短く立ち端部は丸い。	外面回転ナデ 底部ヘラ削り 内面回転ナデ左回り	精緻、白色粒 (外)灰色 (内)灰色	
3－10	坏身	口径 11.8cm 受部径 14.0cm	立ち上がりは内傾して中程より直立気味にやや長く立ち上がる、端部はやや尖る。	外面回転ナデ 底部ヘラ削り 内面回転ナデ左回り	精緻、白色粒 (外)白灰色 (内)白灰色	
3－11	平瓶 提瓶 ?	口径 7.6cm	平瓶？の口縁部と思われる。外へ開き気味に立ち上がり、外面に稜をもってそこから直立に立ち上がる	内外面とも回転ナデ	精緻、白色粒 (外)白灰色 (内)白灰色	



第14図　4号遺構出土遺物実測図(1)



第15図　4号遺構出土遺物実測図(2)



第16図　4号遺構出土遺物実測図(3)

第6表　4号遺構出土遺物観察表 (1)

番　号	器種	法　量	器形の特徴	成形の特徴	胎土・色調	備　　考
4－1	壷	口　径 14.2cm	くの字に外反するが、頸部上で一端外に小さな膨らみを持つ。二重口縁壷の名残りを示す。	外面ナデ 内面ハケ後ナデ	良好、堅緻、白色粒、角閃石石英、長石、 (外)赤褐色 (内)暗褐色	
4－2	壷	口　径 8.9cm 器　高 14.4cm	短頸壷で直立気味で立ち上がり、やや内湾する。 体部外面オサエ痕が顕著に残器壁の凹凸が目立つ。	外面オサエ後ナデ 内面ヘラケズリ口縁部オサエ後ナデ	もろい 2～3㎜大の茶色粒を含む (外)白茶褐色 (内)白黄褐色	
4－3	壷	口　径 16.9cm 器　高 27.8cm	胴部は球形をなし、頸部からやや外反しながら長く立ち上がり、端部でわずかに、内湾する。	内外面ともハケ及びナデ	良好、堅緻、1～2㎜大の茶褐色の粒を含む (外)茶褐色 (内)白茶褐色	
4－4	壷		胴部で大きく膨む。頸部は一端直立気味に立ち上がって大きく外反する。	外面ナデ 内面ヘラ削り後ナデ	ややもろい 灰色粒、白色粒 (外)灰茶色 (内)灰茶色	
4－5	甕	口　径 18.1cm	くの字に外反する	内外面ともハケ目	良好、やや軟質、赤色粒、白色粒 (外)白褐色 (内)白褐色	
4－6	甕	口　径 15.1cm	くの字に外反し、内湾気味に立ち上がる内面端部で断面三角形をなし稜をもつ。	外面ハケ目ナデ 内面ナデ、ヘラ削り	良好、堅緻 斜長石、石英赤色粒（2㎜大） (外)明褐色 (内)淡黄褐色	
4－7	甕	口　径 19.3cm	くの字に外反し、口縁端部外面に稜をもつ	外面平行タタキ 内面ハケ目	もろい 2～3㎜大の赤茶色粒を含む (外)淡茶褐色 (面)淡茶褐色	スス付着
4－8	高坏	口　径 15.3cm	緩やかに外反し、端部近くでさらに外へ広がる	内外面ともナデ	良好、堅緻、斜長石、石英、赤色粒 (外)明褐色 (内)明黄褐色	
4－9	高坏	口　径 14.1cm 器　高 8.7cm	脚部は八の字状に大きく開き、短い。頸部より段を有し、稜をなす。口縁端部でさらに外へ折れ曲がる。朱が内外面とも付着	内外面ともナデ	良好、やや軟質、赤色粒、角閃石、小礫（5～㎜1cm大） (外)淡褐色 (内)淡褐色	内外面朱付着
4－10	碗	口　径 8.4cm 器　高 4.1cm	手捏ね碗である。外へ開き気味に立ち上がりやや内湾する	外面オサエ後ナデ 内面ナデ	やや良好、硬質、赤色粒（2～3㎜大） (外)白褐色 (内)白褐色	

第7表　4号遺構出土遺物観察表 (2)

番　号	器種	法　量	器形の特徴	成形の特徴	胎土・色調	備　　考
4－11	鉢	口　径 10.1cm 器　高 6.6cm	器壁がやや厚く、内湾する	外面ハケ目ナデ 内面ハケ目ナデ	やや良好軟質 角閃石、白色粒 (外)黄褐色 (内)黄褐色	
4-12	鉢	口　径 18.8cm	やや直立気味に立ち上がり内湾し、端部近くで外へ折れる。外面に朱付着	外面ナデ 内面口縁部ヨコナデ 不定方向ナデ	良好、角閃石、石英、白色粒 (外)赤褐色 (内)赤褐色	外面 朱付着
4－13	坏蓋	口　径 12.1cm 器　高 3.7cm	口縁部は若干内側に内湾し、端部は丸い。天井部はやや平たくなる。	外面回転ナデ 回転ヘラ削り 内面回転ナデ	堅緻、白色粒 (外)青灰色 (内)青灰色 (断)紫灰色	
4－14	坏蓋	口　径 13.1cm	口縁部は若干内側に内湾し、端部はとがる天井部はやや平たく面をなす。	外面回転ナデ 回転ヘラ削り 内面回転ナデ	堅緻、白色粒、 (外)青灰色 (内)青灰色	
4－15	坏蓋	口　径 12.7cm	口縁部は外反しながらのび、端部はややとがる。天井部は高く、丸みをおびる。	外面回転ナデ 回転ヘラ削り 内面回転ナデ	堅緻 白粒、細砂粒、 (外)灰色 (内)灰色 (断)灰色	
4－16	坏身	口　径 12.0cm 受部径 14.6cm	立ち上がりは内傾してのび端部は鋭い。受部は水平にのび、端部は丸い。	内外面とも回転ナデ	良好、堅緻、 白色粒 (外)青灰色 (内)青灰色 (断)紫灰色	
4－17	坏身	口　径 11.6cm 受部径 14.1cm	立ち上がりは、内傾してのび端部は丸い。受部はやや上外方にのび、端部は丸い。	外面回転ナデ 回転ヘラ削り 内面回転ナデ	良好、堅緻 白色粒 (外)青灰色 (内)青灰色 (断)青灰色	
4－18	坏身	口　径 10.2cm 受部径 12.7cm	立ち上がりは内傾してのび端部はややとがる。受部はやや上外方にのび端部はとがる。底部はやや平らである。	外面回転ナデ 回転ヘラ削り 内面回転ナデ	良好、堅緻 白色粒 (外)青灰色 (内)青灰色 (断)紫灰色	
4－19	坏身	口　径 11.4cm 受部径 13.9cm	立ち上がりは、直立気味に立ち、端部はややとがる。受部は上外方にのびる	外面回転ナデ 回転ヘラ削り 内面回転ナデ	良好、堅緻 白色粒 (外)白灰色 (内)白灰色 (断)灰色	
4－20	坏身	口　径 11.8cm 受部径 14.4cm	立ち上がりは内傾してのび端部は鋭くとがる	内外面とも回転ナデ	良好、堅緻 白色粒 (外)明紫灰色 (内)明紫灰色 (断)紫灰色	外面自然釉付着

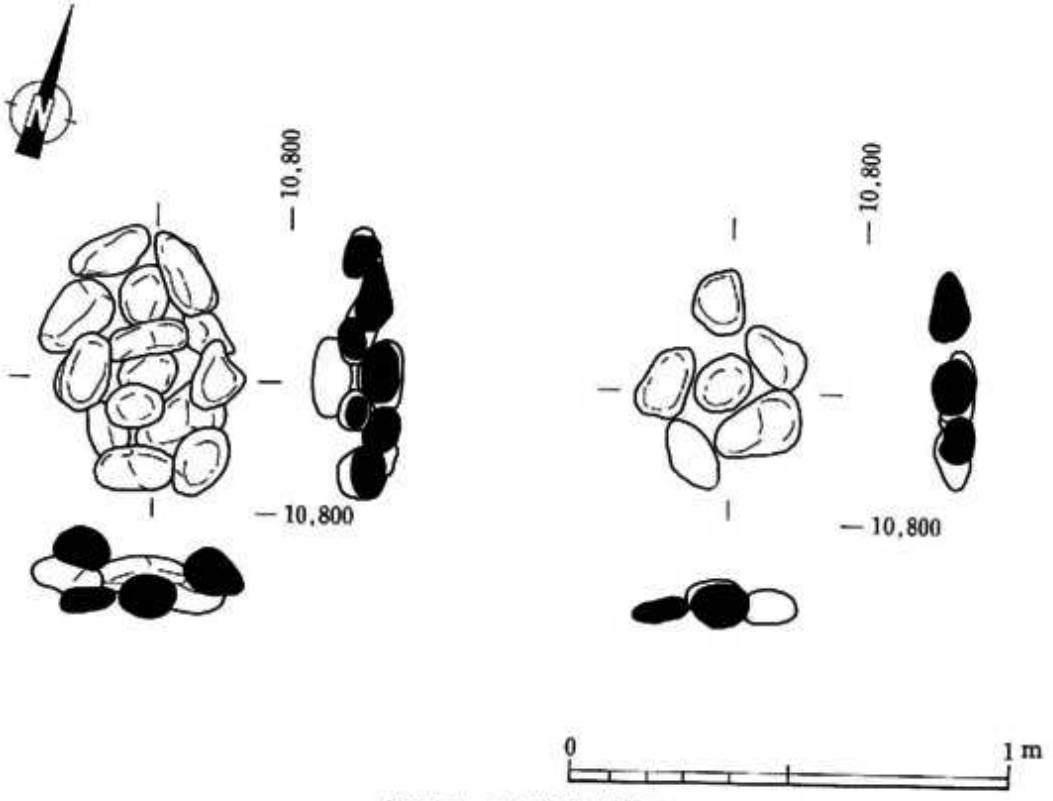
第8表　4号遺構出土遺物観察表 (3)

番号	器種	法量	器形の特徴	成形の特徴	胎土・色調	備考
4－21	甕	口径 30.4cm	口縁端部で面をなす。外面に波状文を有する。2ケ所、2条の沈線がある。	外面回転ナデ波状文 内面回転ナデ	良好、堅緻 白色粒、石英 (外)黒灰色 (内)黄淡灰色 (緑色混じり) (自然釉)	全面に自然釉付着
4－22	甕		胴部はやや肩が張り丸い。	外面回転ナデ タタキの上から回転カキ目 内面同心円文当て具後スリ消し	良好、堅緻 白色粒、 (外)黒灰色 (内)暗黒灰色 (断)紫灰色	
4－23	壺	口径 10.5cm 器高 8.2cm	小型丸底壺で口径が胴径よりやや長い。頸部はくの字に外反し稜をなす。	外面ナデ 内面ヘラ削り後ナデ	良好、軟質 石英 (外)明茶褐色 (内)明茶褐色	スス付着
4－24	壺	口径 11.4cm	短頸壺で頸部より直立に立ち上がり、胴部はあまり膨らない。	外面ヘラ削り(磨滅) 内面ヨコナデ	良好、やや軟質 石英、茶色粒、 (外)茶褐色 (内)茶褐色	スス付着
4－25	甕			外面タテ方向へハケ後一部ナデ 内面ヨコ方向へハケ後上部ユビナデ	良好、堅緻 斜長石、石英、白色粒 (外)褐色 (内)明褐色	
4－26	甕	口径 15.6cm 器高 20.6cm	ややくの字に外反し端部はややとがる。胴部は口縁とほぼ同一である。	外面ヘラ削りナデ 内面ヘラ削り	良好、やや軟質 石英、角閃石 (外)白茶褐色 (内)白茶褐色	スス付着
4－27	甕	口径 18.2cm	頸部は緩やかに一端直立気味に立ち上がり外反する。胴部はあまり膨しない。	外面ナデ 内面ナデ	良好、堅緻 長石、白色粒 (外)明茶褐色 (内)明茶褐色	スス付着
4－28	甕	口径 18.8cm	体部は長胴形と呈し、口縁部と胴部最大径がほぼ等しい。頸部は一端直立気味に立ち上がり緩やかに外反する。	外面タテ方向へヘラ削り 内面不定方向へナデ	もろい 赤色粒、角閃石、斜長石 (外)白茶褐色 (内)黄茶褐色	スス付着

4号遺構出土遺物

4号遺構からは、壺、甕、高坏、碗、鉢、須恵器等が出土した。

1～4は、壺である。1は頸部上に僅かな膨らみを持ち長く外反する。2は短頸壺で内面にヘラ削りを有する。3は頸部から内湾しながら長く立ち上がり、胴部は球形を呈する。5～7は甕である。5、7は頸部がくの字に外反する。6はくの字に外反して口縁部は内面に突出部を持ち稜をなす。8、9は高坏で9は脚部は裾部に向かい大きくハの字に開き、口径と底径がほぼ同じである。10は手捏ね碗である。11、12は鉢である。11は内外面にカキ目を有し、12は体部から復元口径18.7cmを測り、内外面に朱が付着している。13～22は須恵器である。13～15は坏蓋で天井部は回転ヘラ削りを施す。16～20までは坏身で18、19は底部がやや平たく面をなす。20は外面に自然釉が付着している。21は2cmの幅で面をなし、外面体部に波状文を有する。22は甕の胴部で大きく膨らみを持ち外面に回転カキメ、内面は同心円文タタキ後擦り消しが認められる。23、24は壺である。23は頸部よりくの字に外反して口径と胴部径がほぼ同一である。24は頸部から口縁にかけて直立して立ち上がる。25～28までは甕である。26はくの字に立ち上がり、27、28はあまり膨らまない胴部から大きく外反する。以上、4号遺構は1～12と23～26までは弥生時代終末～5世紀前半前後と13～22、27、28までは6世紀末に位置づけられる。



第17図　5号遺構実測図

5） 5号遺構

調査区の上段部中央に位置して、長軸方位をN－15°－Wにもつ集石である。上段部は削平が著しいこともあり、表土剝ぎの際、現表土からわずか30cm足らずの位置で検出をみた。総計15個の河原石で組んだ状況が観察され、長さ約60cm、幅約50cmを測る。この石の形状は、偏平で楕円形をなし、約10cm～20cmの石材を精選している。この集石は、2段の構成で上段は9個、下段は6個の配石と思われる。上段は、隙間が多く、配列に対してあまり規則性がない。組まれた当初は、石が検出した時点よりも多く配石されていた可能性もある。下段は、6個の石を花弁状に配列している。この集石の下には掘り込みは見られず、確認の為30cm幅で10cm程度掘り下げたが、掘り込みは確認出来なかった。この集石の状況などからみて埋葬関係・祭祀関係遺構と思われるが、即断は出来ない。時期についても不明である。

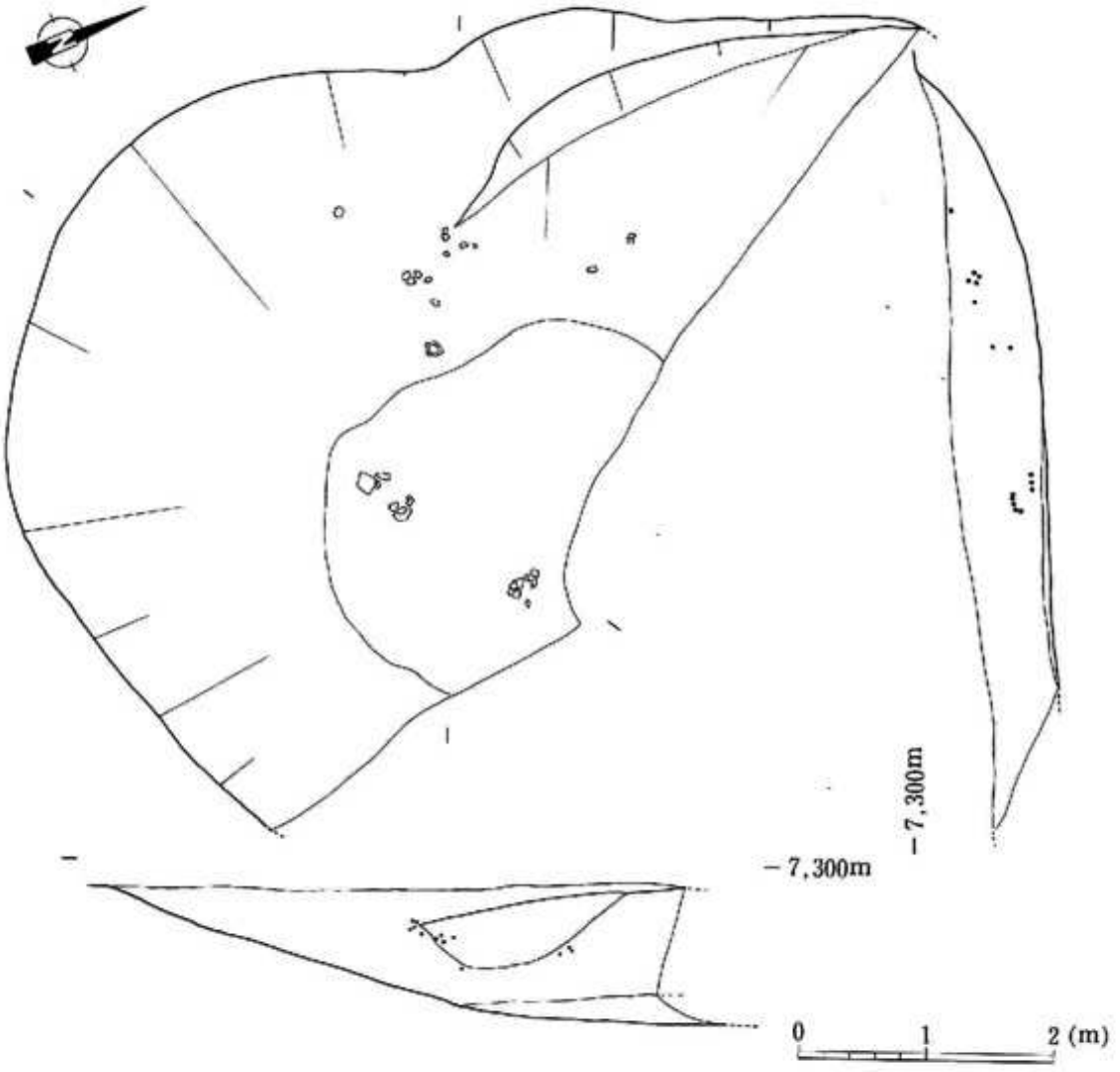
6） 6号遺構

調査区の南東部に位置し、3、4号遺構と同じく柚ノ木元地区の水田へ接する斜面に位置する。形態は半円形を呈する。規模は、最大幅2.5m、検出面より最大深0.6mを測る。遺構の約半分は農道によりカットされている。遺物は流れ込みによると思われる。

6号遺構出土遺物

6号遺構からは壺、甕、高坏、須恵器が出土した。

1・2は壺である。1は複合口縁壺で複合部がやや外反気味に立ち上がる。2は小型丸底壺で口縁に向かって緩やかなくびれを持つ。3～14までは甕である。3～8までは口縁部で、3は内面に明確な稜を持ちながらくの字に折れる口縁部である。4～6は大きく外反する。7はスマートな体部からやや肥厚しながら外反する。外面は不定方向にナデが顕著に見られる。8は直立気味な体部から肥厚外反し端は平たく面をなす。9・10・12はいずれも頸部から体部にかけての破片でくの字に外反しあまり膨らみを持たない。11は体部で内外面ともにタテ方向にハケメを施す。13・14は底部で13は丸底、14はやや尖底し外面はカキメを有する。15～22は高坏である。15は坏部で屈曲部に稜を有し外反する。16・17はいずれも坏の口縁部で内外面ともヨコナデが見られる。18は坏と脚の接合部位にあたり、屈曲部は内外面とも稜をなし、内面にはハケ目が見られる。19～22までは高坏脚部で、19は脚裾部に稜を持つが、20は陵を持たない。両者ともに外面にはハケ目が施される。21は外内面とも稜を持ち、内面にはヘラ削りが施される。22は脚裾部で内湾気味に大きく開く。内面にはハケ後一部ナデが見られる。23～26は須恵器である。23は坏身、24は高坏脚部で裾部に向かって大きく外反し端部でさらにはねあがる。25、26は焼成時の釉着接合遺物で25は外面に平行タタキ、26は内面に同心円文が認められる。以上、5世紀前半前後と6世紀末に位置づけられる。



第18図　6号遺構実測図

第9表　6号遺構出土遺物観察表 (1)

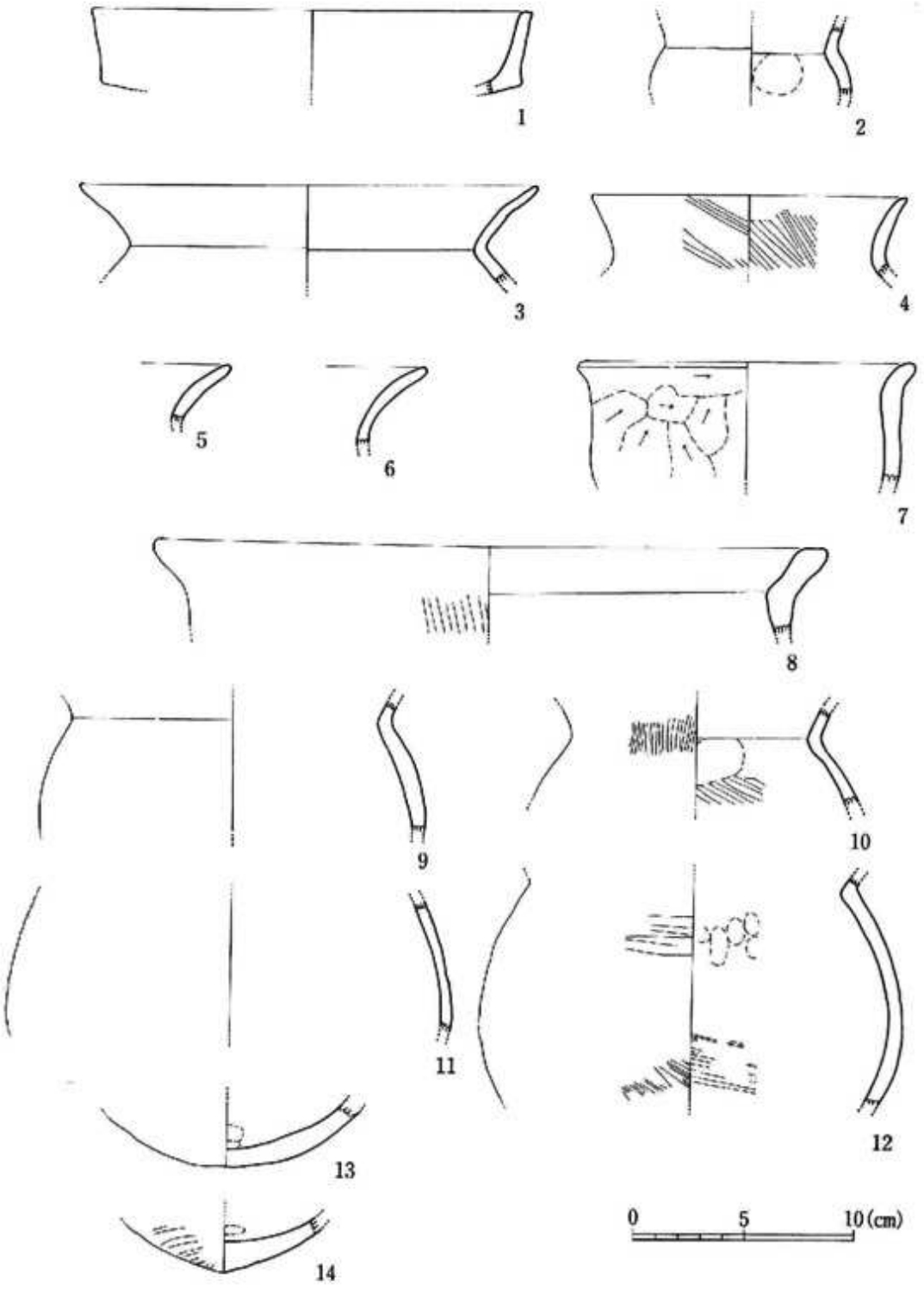
番　号	器種	法　量	器形の特徴	成形の特徴	胎土・色調	備　考
6－1	壺	口　径 19.1cm	二重口縁壺の口縁部で直立に立ち上がる、屈曲部に貼り付けが見られる。	内外面ともナデ	堅緻、角閃石、石英、白粒 (外)暗褐色 (内)暗褐色	

第10表　6号遺構出土遺物観察表 (2)

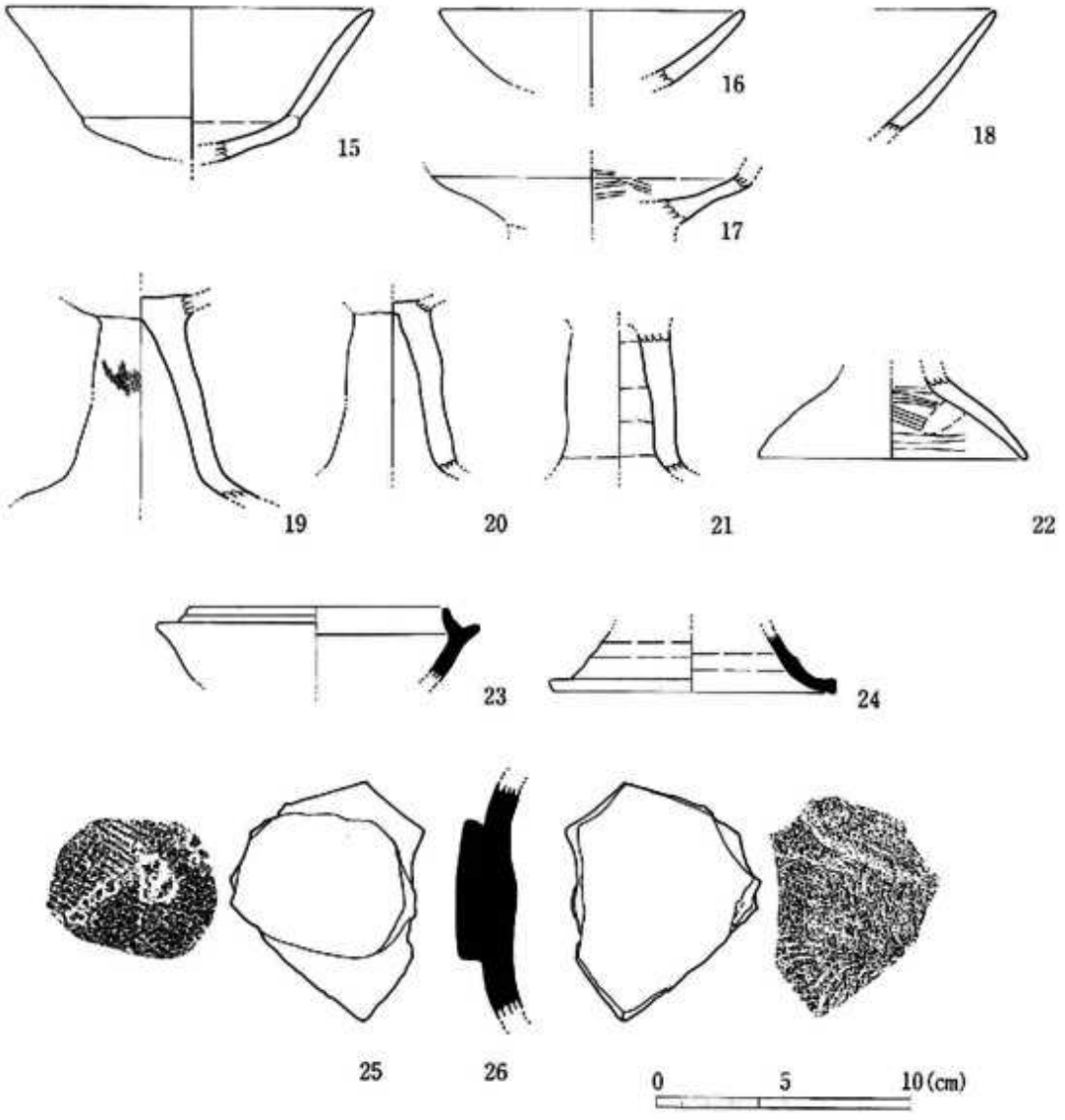
番　号	器種	法　量	器形の特徴	成形の特徴	胎土・色調	備　考
6－2	壺		小型丸底壺の頸部で緩やかに外反する。	外面ナデ 内面オサエ後ナデ	軟質、角閃石、斜長石、赤色粒 (外)明褐色 (内)淡黒色	
6－3	甕	口　径 20.7cm	内面に明瞭な稜を持ってくの字に屈曲し、中程で緩やかに外反する	内外面ともナデ	軟質、もろい 斜長石、赤色粒 (外)明褐色 (内)明褐色	口縁部外面にススが付着
6－4	甕？	口　径 14.2cm	くびれ部から緩やかに外反する。輪積み痕あり	外面ハケ目後ナデ 内面ハケ目後ナデ	軟質、斜長石、白色粒 (外)白褐色 (内)淡褐色	
6－5	甕？		端部は丸い	内外面ともナデ	軟質、斜長石、角閃石 (外)明褐色 (内)明褐色	
6－6	甕？		口縁部、一旦直立気味に立ち上がり中程で大きく外反する	内外面ともナデ	堅緻、角閃石、斜長石、赤色粒 (外)明褐色 (内)白褐色	ススが付着
6－7	甕	口　径 14.7cm	口縁部、肥厚しながら緩やかに外反し内面に稜を持たない。体部はあまりふくらみを持たず長胴になると思われる。	外面不定方向へナデ 内面ヨコナデ	堅緻、金雲母、石英 (外)淡褐色 (内)淡褐色	
6－8	甕	口　径 30.0cm	口縁部。一度直立気味に立ち端部に向かってくの字に外反し厚くなる。	外面荒いハケ目 くびれ部ヨコナデ 内面ヨコナデ	堅緻、角閃石、石英、砂粒 (外)赤褐色 (内)暗赤褐色	
6－9	甕		胴部。くの字の頸部から体部に向い緩やかにふくらむ	外面ヨコナデ 内面オサエ後ヨコナデ	堅緻、角閃石、斜長石、赤色粒 (外)淡明褐色 (内)明褐色	ススが付着
6－10	甕		頸部のくの字から体部に向い、やや肩が張る。内面に稜を持つ。	外面くびれ部タテ方向のハケ目。 体部ナナメのハケ後一部ナデ 内面ナナメ方向へのハケ目後オサエ	堅緻、角閃石、石英 (外)淡黒茶色 (内)淡黄色	内面コゲ付着
6－11	甕？			外面ヨコ、ナナメのハケ目。 内面不定方向のハケ後オサエナデ	堅緻、角閃石、斜長石 (外)暗褐色 (内)暗褐色	
6－12	甕？		頸部から屈曲部から体部に向い緩やかにふくらむ内面に稜を持つ	外面磨滅しているがハケ後、ミガキ 内面屈曲部オサエ後ナデ、中程ハケ後タテへナデ	堅粗、斜長石、赤色粒 (外)淡褐色 (内)明白黄色	
6－13	甕？		底部丸底を呈する	外面磨滅不明 内面オサエ後不定ナデ	堅、角閃石、斜長石、石英 (外)白黄色 (内)白黄色	外面底、黒ハンあり
6－14	甕？		底部、やや尖状をなす	外面粗いカキ目 内面オサエ後ナデ	堅、粗い、斜長石、赤色粒、小礫 (外)明赤褐色 (内)淡茶褐色	

第11表　6号遺構出土遺物観察表 (3)

番号	器種	法量	器形の特徴	成形の特徴	胎土・色調	備考
6－15	高坏	口径 14.6cm	坏接合部に明瞭な段を持ち、口縁部はやや直立気味に立ち上がり先端部で小さく外反する	外面ヨコナデ 内面ヨコナデ	堅緻、角閃石、斜長石、赤色粒 (外)淡茶色 (内)淡茶色	
6－16	高坏		坏口縁部大きく外反するが器高は低い	内外面ともナデ	堅、緻、角閃石、斜長石 (外)淡褐色 (内)淡褐色	
6－17	高坏		坏口縁部で立ち上がりが長く、外反する	外面ナデ 内面ヨコハケ後ナデ	堅緻、角閃石、金雲母、斜長石、赤色粒 (外)淡褐色 (内)淡褐色	
6－18	高坏		坏部と脚部の接合部で大きく開く	外面丁寧なナデ 内面ハケ後ナデ	堅緻、角閃石、石英 (外)淡褐色 (内)白褐色	外面スス付着
6－19	高坏		脚部上、下の径の差が大きくふくらみを持つ、外湾気味に開く裾部を持つ。	外面タテ方向へのハケ目 内面左方向へヘラ削り	堅緻、角閃石、赤色粒 (外)白黄色 (内)淡褐色	
6－20	高坏		脚部にスマートなふくらみを持ち、上下の径があまり変わらない。	外面タテ方向へのハケ後ナデ 内面ナデ	堅緻、角閃石、斜長石、赤色粒 (外)淡褐色 (内)淡黒灰色	
6－21	高坏		脚部スマートで中程で少しふくらみを持つ。器壁もやや厚い。	外面丁寧なナデ 内面左方向へのヘラ削り	堅緻、角閃石、赤色粒、斜長石 (外)明褐色 (内)明褐色	内外面に黒ハンあり
6－22	高坏	裾径 10.2cm	裾部でやや内湾気味に大きく外反する	外面ハケ目（磨滅） 内面ハケ目（磨滅）	堅緻、角閃石、斜長石、赤色粒 (外)淡褐色 (内)淡茶褐色	
6－23	坏身	口径 10.2cm 受部径 12.8cm	立ち上がりは内傾して中程よりやや直立的に立ち端部は丸い。	内外面とも回転ナデ	精緻、白色粒 (外)白灰色 (内)白灰色	
6－24	高坏		高坏脚部端部では下外方に伸び、端部は面をなす	内外面ともヨコナデ	精緻、小礫混 (外)明黒灰色 (内)白灰色 (断)白灰色	内面に自然釉付着
6－25 6－26	釉陶器		焼成時釉着 625、外面自然釉付着、器、壁が厚い 626、器壁が厚く、やや内湾する	625、外面平行タタキ内面、不明 626、外面平行タタキ内面、同心円文タタキ後ナデ	625、精緻、白粒 (外)淡黄色(釉) (断)紫灰色 626、精緻 (外)青灰色 (内)青灰色 (断)紫灰色	



第19図　6号遺構出土遺物実測図(1)



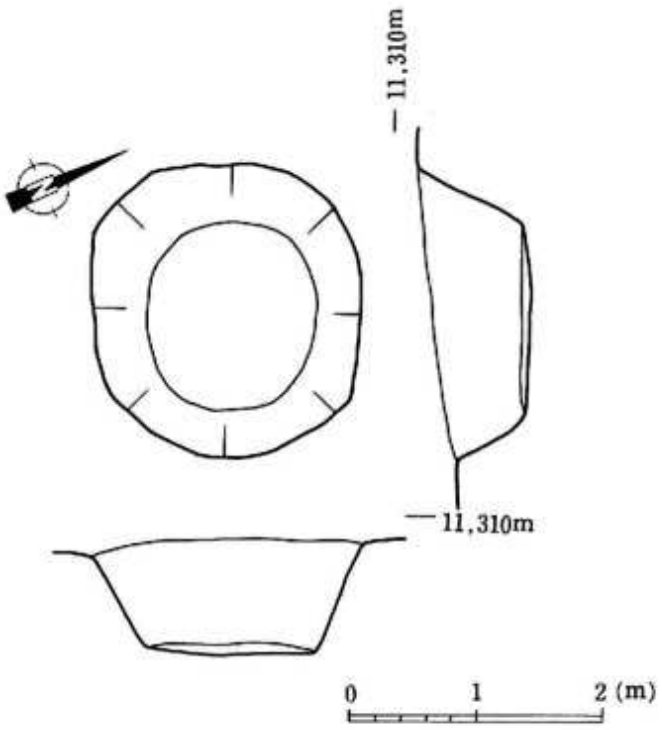
第20図　6号遺構出土遺物実測図(2)

7）7号遺構

調査区の南西下段、標高8.5mの位置に存在し、形態は円形の土坑で長軸をN－68°－Wにとる。長さ2.3m、幅2.1m、検出面から床面まで最大90cmを測り擂鉢状を呈する。検出状態は、円礫・角礫等と一緒に投棄されたと思われる近世遺物が、床面に着くもの宙に浮いているものと混在して認められた。当初、この付近には木が生い茂っていた為に、表土剝ぎの際にそれらの木の抜け跡にその攪乱土が堆積しているのかと思える程、覆土の状態が悪く、遺物に関しては、総べて一括して取り上げを行った。

7号遺構出土遺物

碗（1、3、4、6、7）肥前系陶磁器類と唐津陶胎染付碗とに分けられる。1は肥前染付碗で広東碗と思われる。2は唐津陶胎染付碗で剣先文が施文され、体部と高台内に淡黄白色の施釉がみられ畳付部は釉がかからず焼成の為明茶褐色を呈する。4は肥前系の淡緑青色の青磁碗で、内外面ともに施釉されている。瓶（6、11）6は青磁の花瓶と思われ畳付は釉剝ぎされている。11は青磁花瓶の頸部で口縁は緩やかに外反すると思われ、頸肩部には鳥形をなすものが貼り付けられている。施釉は外面のみである。7は肥前系の染付で筒形碗である。

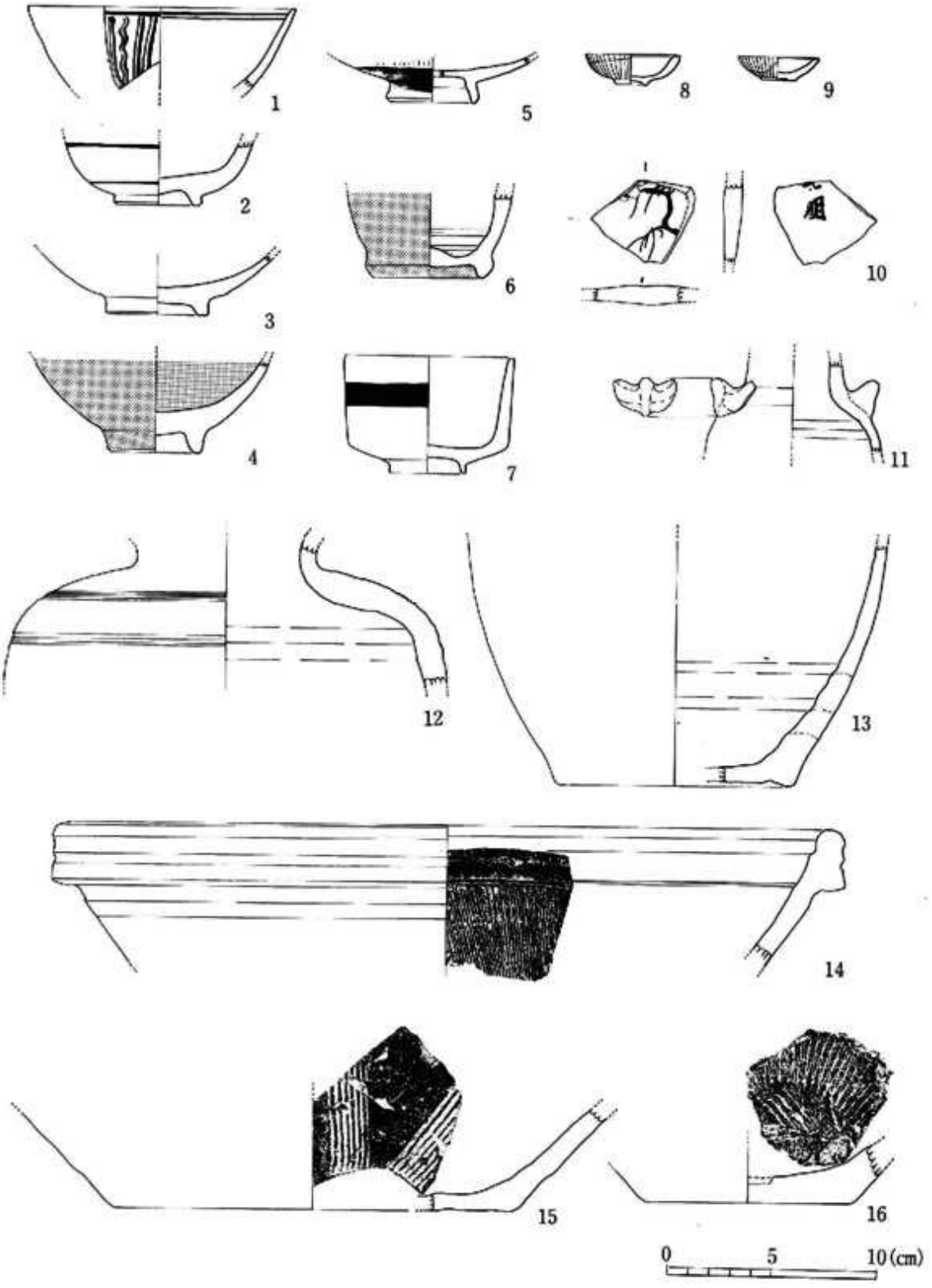


第21図　7号遺構実測図

皿（3、5、8～10）3は唐津系緑釉皿で見込みは蛇の目釉剝ぎされ、高台は無釉である。5は産地が定かでないが、唐津系と思われ外面底部から高台にかけて鉄釉が施釉され、その施釉部より胴部に向かってカキ目が施文される。8、9は肥前の紅皿である。両者とも型押し成形で外面はカキ目が見られる。10は皿の見込み部と思われ、肥前染付である。内面には草花文の施文が見られ、高台内には「太明年製」銘をもつ。壺12は中世・備前系の壺ではないかと思われるが定かではない。外面は焼成が悪く自然釉が付着している。甕13は唐津系の甕ではないかと思われる。外面にはコゲ茶色の釉がかかり、輪積み痕が明瞭に認められる。擂鉢（14～16）はいずれも備前系擂鉢で14は内面に11本単位の櫛歯状工具によるカキ目痕が見られる。15は備前系であると思われるが、作りが粗雑で中世の時期まで遡るのではないかと思われ、外面はナデ仕上げ、底部はヘラ切り、内面は7本単位の櫛歯状工具によるカキ目痕がみられる。16は底部で内面にカキ目痕を有し、交錯している。これより7号遺構の時期については、18世紀後半から19世紀中頃に位置づけられる。

8）8号遺構（1号集石土坑）

柿ノ木畑調査区のほぼ中央に位置している。不定形のプランを呈するが、長方形に円形のプランが切り合っていると思われるが土層状態から新旧関係を判別することは難しかった。長軸



第22図　7号遺構出土遺物実測図

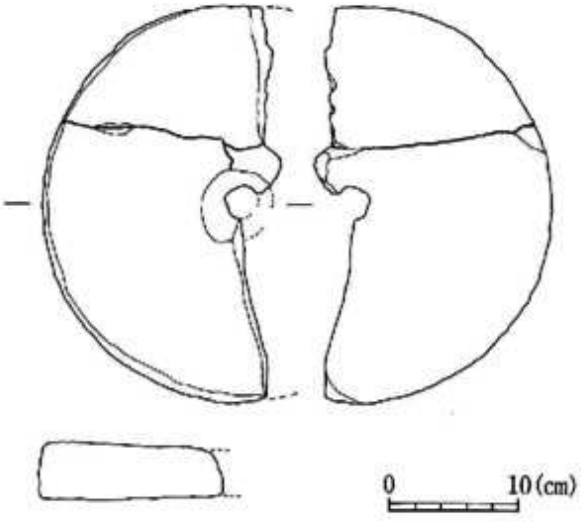
第12表　7号遺構出土遺物観察表 (1)

番号	器種	法量	文様・特長	産地・時期	胎土・色調	備考
7－1	碗	口径 12.7cm	染付、広東碗	肥前 1790年～1860年代	染付部、淡青色 胎土、淡白色	陶器
7－2	碗	底径 3.8cm 残存高 3.1cm	陶胎染付	唐津 18世紀後半	釉、淡緑灰色 胎土、黒灰色	陶器
7－3	皿	底径 4.7cm 残存高 2.9cm	見込蛇、目釉剝ぎ 高台無釉	唐津 17世紀後半～18世紀前半	釉、緑釉 胎土、淡黄白色	陶器
7－4	碗	底径 4.2cm 残存高 4.4cm	内外面とも施釉	肥前 18世紀か？	釉、淡緑青色 胎土、淡白色	青磁
7－5	皿	底径 4.1cm 残存高 2.2cm	外面、中位より高台中位にかけて鉄釉 内面、透明釉	唐津？ 時期不明	鉄釉、暗黒褐色 内面、透明釉 胎土、茶褐色	陶器
7－6	瓶	底径 5.2cm 残存高 4.1cm	外面のみ施釉、内面見込が隆起しており若干の釉がかり	肥前？ 時期不明	釉、明緑青色	青磁
7－7	碗	口径 8.0cm 残存高 5.6cm	筒形碗、染付	肥前 時期不明	染付部、淡青色 胎土、淡白色	陶器
7－8	皿	口径 4.5cm 器高 1.5cm	型押し成形、外面カキ目 内面全面施釉、外部一部施釉、紅皿	肥前 18世紀後半～幕末	釉、淡白色 胎土、明白色	白磁
7－9	皿	口径 3.9cm 器高 1.1cm	型押し成形、外面カキ目 内面全面施釉 外部一部施釉　紅皿	肥前 18世紀後半～幕末	釉、淡白色 胎土、明白色	白磁
7－10	皿		見込部片、染付草花文施文、高台内「太明年製」銘	肥前	染付部、淡青色 胎土、明白色	陶器

第13表　7号遺構出土遺物観察表 (2)

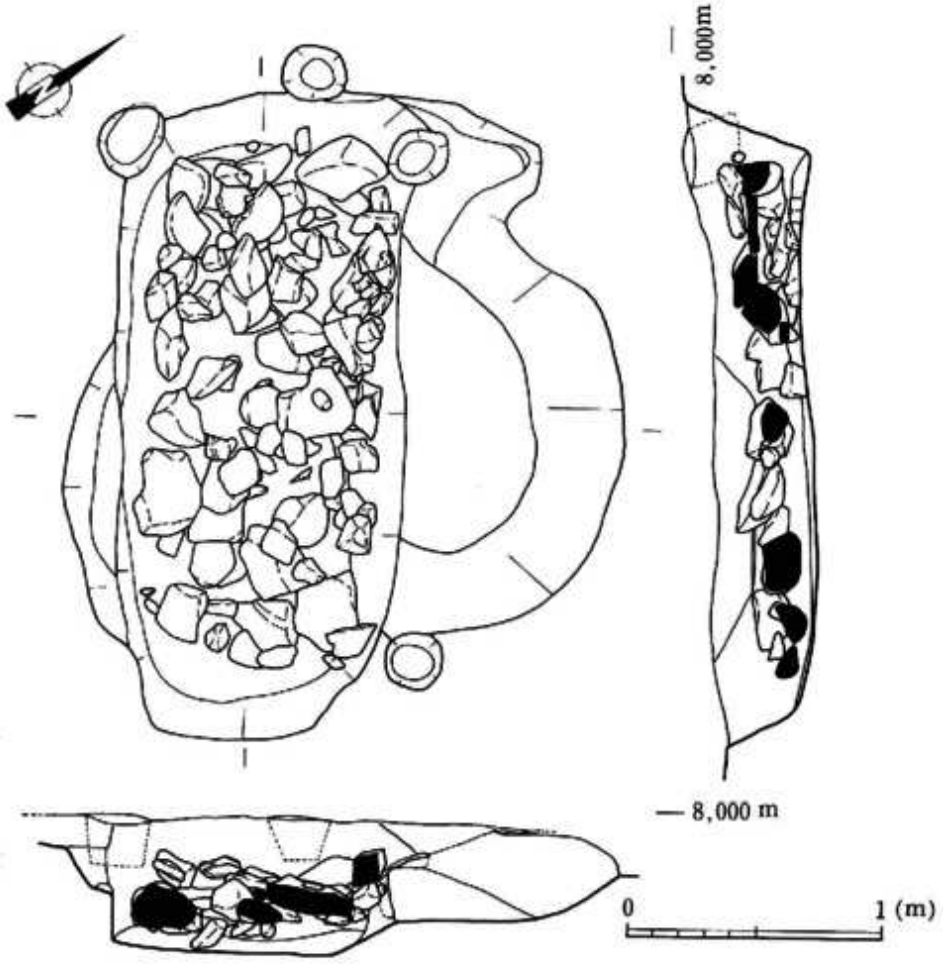
番号	器種	法量	文様・特長	産地・時期	胎土・色調	備考
7－11	瓶		花瓶、外面のみ施釉 頸部、鳥形装飾貼り付け	肥前	釉、淡緑灰色 胎土、明白色	磁器
7－12	壺		外面5本、3本単位の沈線、内面ナデ、自然釉付着	備前 中世か？	胎土、淡黄茶色	陶器
7－13	甕		外面施釉、輪積み	唐津系？ 時期不明	釉、黒茶色 胎土、赤褐色	陶器
7－14	擂鉢	口径 36.7cm	外面上部、口縁部ヨコナデ中位よりヘラ削り、内面ナデカキ目	備前 18世紀後半～19世紀	胎土、明赤褐色	陶器
7－15	擂鉢	底径 19.0cm 残存高 5cm	外面ナデ、底部ヘラ切り後ナデ、7本単位でのカキ目	備前系 中世か？	胎土、黒灰色	陶器
7－16	擂鉢		外面底部ヘラ削り	備前 18世紀後半～19世紀	胎土、赤褐色	陶器

2.5m短軸2.2m、遺構検出面より最大深0.5mを測り、長軸方位N－51°－Wにとる。この土坑内には、円礫・角礫等を用いた集石が認められる。人頭大の礫から拳大の礫までと規則性がなく、石材は凝灰岩を用いる。集石は、円礫を敷き詰めた上に角礫が一部直立する状態が確認が出来た。一部の礫については、焼成を受けている痕跡が認められる。また、この長方形プランを囲うように2.0m×1.2mの間隔で柱穴を3基確認した。尚、残りもう1基の検出



第23図　8号遺構出土遺物実測図

は、出来なかった。検出当初、土坑墓或いは火葬墓と思い確認作業に注意をはらったが、人骨等の検出には至らなかった。土層状況は、黒褐色土の中に炭が少量、茶褐色のブロック（2・3cm大）も混入してはいるものの、床面までほぼ単一層で炭化層等は確認出来なかった。時期については、近世の石臼片が出土しているだけで明確な時期や遺構の性格については不明である。



第24図　8号遺構実測図

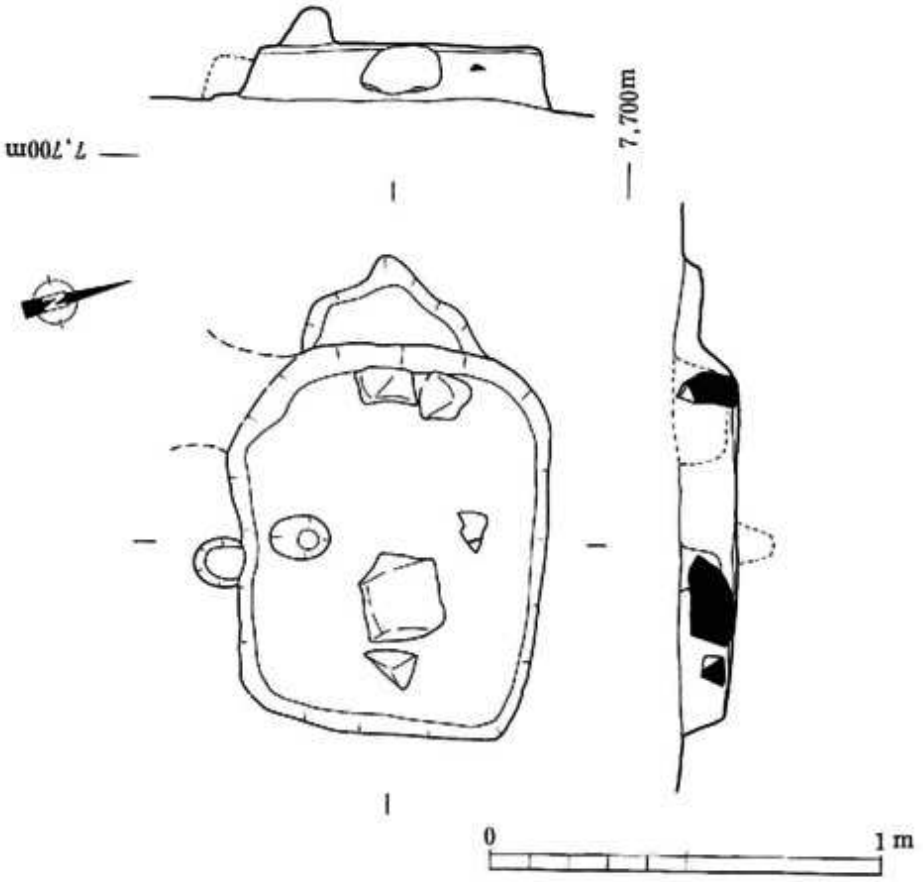
8号遺構出土遺物

石製品である。遺構内2個体の接合遺物、凝灰岩製の石臼で直径が約31cm。上臼と見られる

が、½が欠損していて磨滅が著しい。空転どめは認められるものの供給口や挽手穴は認められない。一部に焼成を受けている痕跡が認められるが、この遺構内に埋もれる以前のものか、それ以後の焼成によるものかは不明である。

9）9号遺構（2号集石土坑）

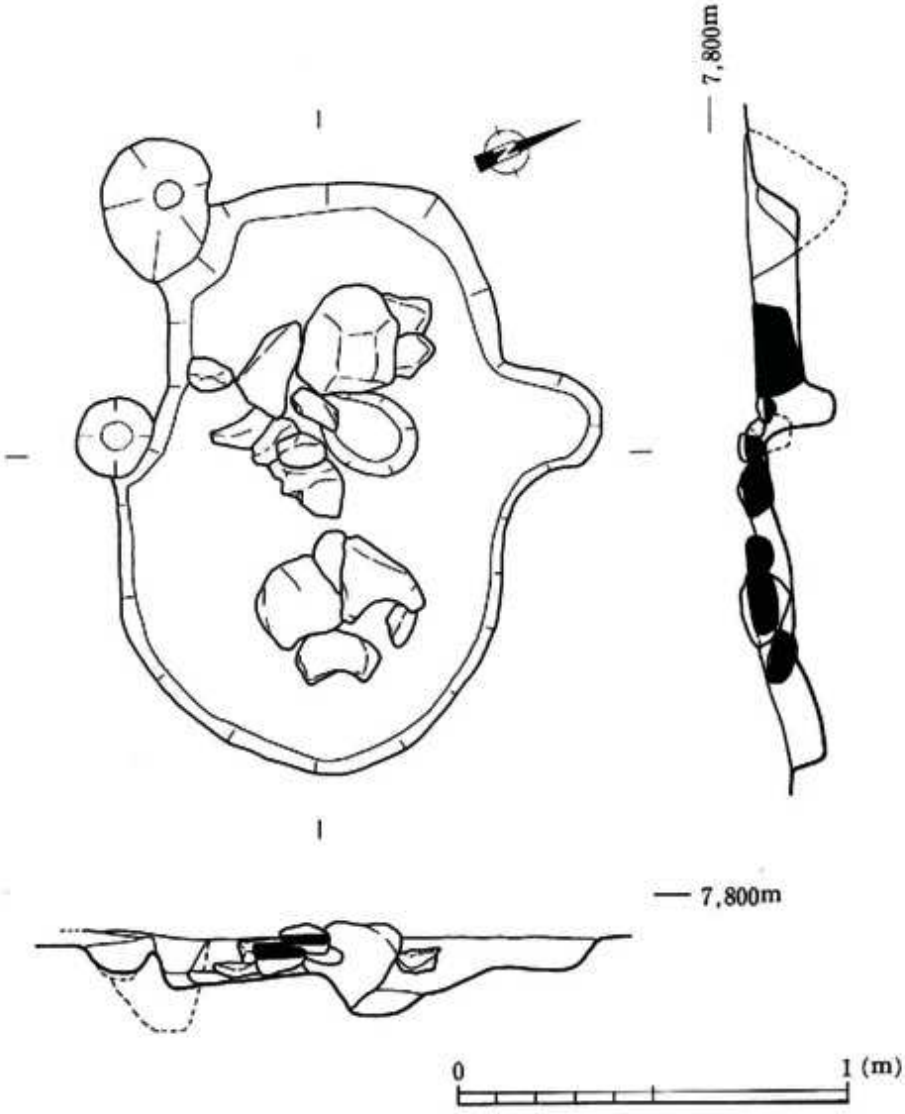
調査区の南部、調査区域外との境付近に位置する。長軸1.3m、短軸0.8m、検出面から最大17cmの深さを測る。長軸方位はN－71°－Eにとる。形態は長方形を呈する。この土坑にも石が集石されており、5基の検出を行っている。いづれの石材も凝灰岩で床面に着き安定している。この土坑は、明らかに焼成を受けており、壁面は一部で赤く焼け、床面には2・3cmの厚さで炭が溜まっていた。土層状況は黒茶褐色土で炭を割りに多く含む傾向が見られるものの、他の混入物に関しては、確認は出来なかった。また、遺物を全く含んでおらず、時期については不明瞭な部分が多いが、土質状態から判断して8号遺構と同時期もしくはその前後に比定出来るのではないかと思われる。



第25図　9号遺構実測図

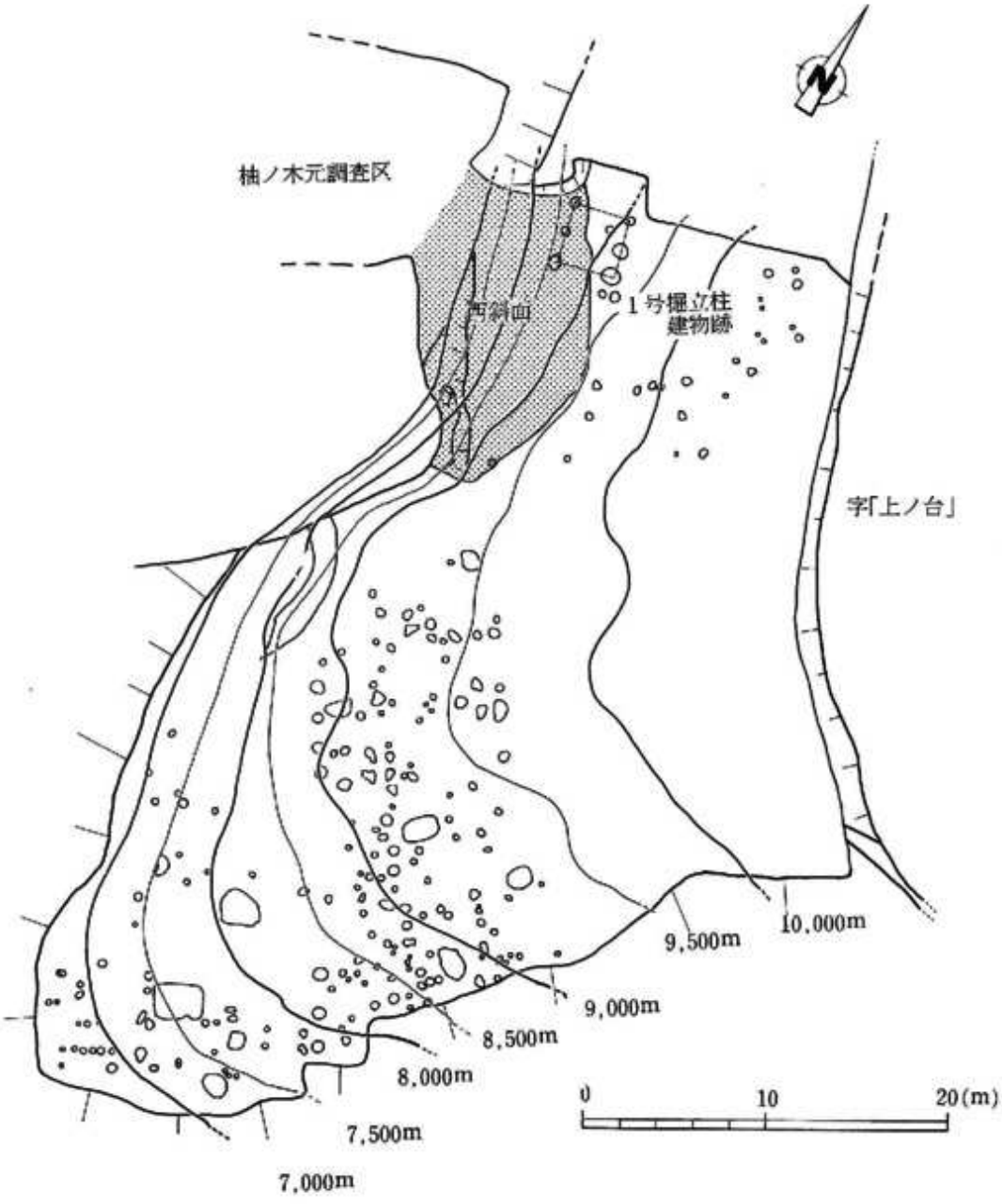
10）10号遺構（3号集石土坑）

調査区ほぼ中央に8号遺構の南東側に隣接する形で位置している。楕円形のプランで長軸1.5m、短軸1.3m、遺構検出面から最大21cmの深さを測る。長軸方位N－67°－Wにとる。この土坑内にも集石が認められるものの、土坑と集石にカットの為欠損が見られる。集石の石材は、8・9号遺構と同じく凝灰岩である。土層状況は、黒茶褐色土の中に若干の炭が混入する。壁面及び集石に焼成を受けた状況を希薄認める。遺物を検出してない為に明確な時期については判断しがたいが、8・9号遺構と同時期もしくはその前後ではないかと考えられる。



第26図　10号遺構実測図

汐月遺跡　平榎調査区全景（航空撮影）



第27図　平榎調査区遺構配置図及び等高線図

第IV章　平榎地区の調査

1．試掘と本調査の遺構概要

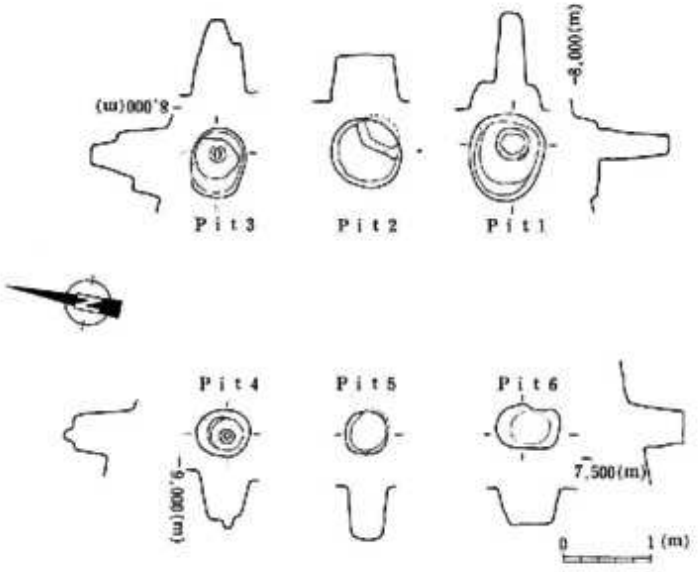
この調査地区は、通称「上ノ台」と呼ばれる小高い台地の南東に位置して標高10m～8m程度の平坦な地形をなし、以前は芋畑・茶畑として利用されていた地区である。この台地は東西に長く伸び、広陵とした杉林が後背の山々へと連なっている。この「上ノ台」は佐伯史談会の佐脇貫一氏によって以前より古代豊後の官倉の一つ「佐伯院」が設置されていた場所と文献史学の面から推測がなされた台地である。この点から、開発事業の及ぶ当台地の南東端に注目し試掘調査を行った結果、ピットと土坑が確認された為、約1600m²を対象にして本調査を行った。

本調査では、掘立柱建物跡1棟（奈良時代後期）、柚ノ木元調査区へと落ちる西側斜面（以下、西斜面）に縄文時代早期、奈良～中世の時期の遺物を検出した。

2．出土遺構と出土遺物

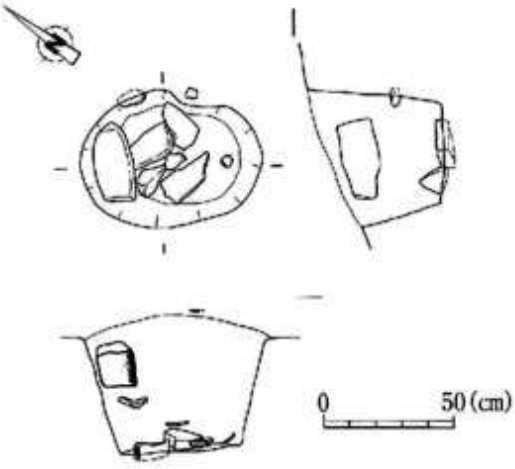
1）1号掘立柱建物跡

調査区の北東端に位置し、長方形のプランで2間×1間、長軸をN－8°－Wにとる。柱間隔は長軸柱間1.7m＋1.7m、短軸は3.2mの間隔を持つ。Pit4～6は西斜面上に位置して上部は削平をうけて遺構検出面のレベル差は0.65m～0.7m程ある。



第28図　平榎調査区1号掘立柱建物実測図

またＰｉｔ６には礎盤が認められる。検出面から約５cm付近に根締めの石を１つと、底面には大小３つの偏平な凝灰岩を礎盤としている。

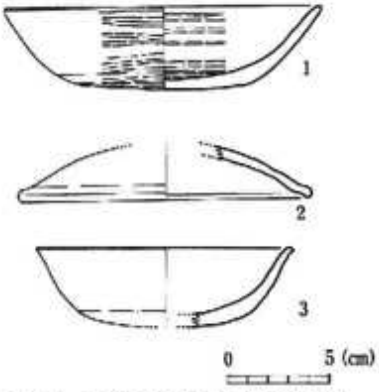


第29図　Ｐｉｔ－６礎盤実測図

２）出土遺物

遺物はＰｉｔ１とＰｉｔ６から出土している。１はＰｉｔ１の出土遺物で土師器の坏で丁寧な回転ヘラ削りを施す。２、３はＰｉｔ６からの出土遺物で２は土師器の蓋で、３は坏である。以上、８世紀中頃に位置づけられる。

３．西斜面の調査



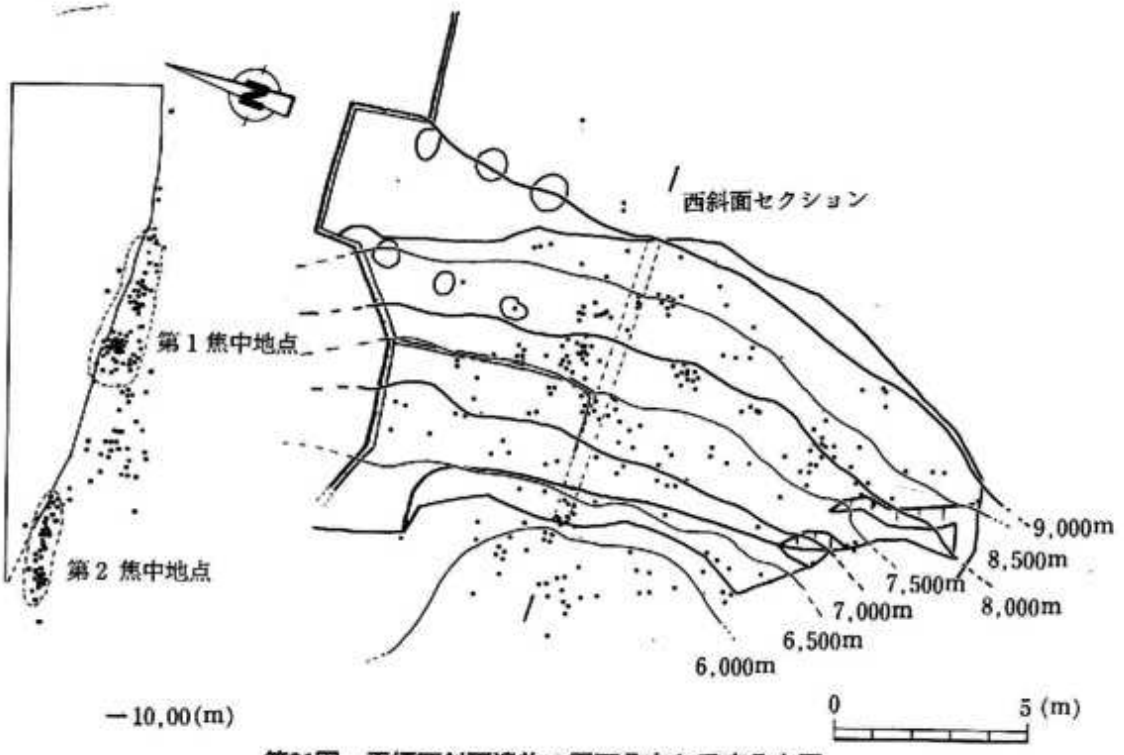
第30図　柱穴内出土遺物実測図

１）土層状況

西斜面の土層堆積状況は、第Ｉ層は黒褐色層で茶畑の耕作土である。第II層は黒黄褐色である。第III層は黄褐色層で大分県に広域に認められる喜界カルデラの爆発によって降下したアカホヤ層と思われる。他地域で認められるものとは若干の違いはあるものの、アカホヤの２次堆積によって変色化したものと観察される。第IV層は淡黒褐色層で粘質である。第Ｖ層は灰色粘質層で白味が強い。第VI層はＶ層に比べて黒味の方が強い粘質層である。第VII層は黒色粘土層で、第VIII層は暗褐色層でやや硬質である。第Ｉ層からII層上面にかけて茶栽培においての攪乱が見受けられ、第IV層～VII層にかけては柚ノ木元地区の水田部と接しかなりの攪乱を受けている。第III層、VIII層においては本来の土層堆積状況を留めているものと思われる。

２）遺物出土状況

遺物は平面的には集中がなく、散在した状況で認められる。次に垂直分布を観察すると、標高約7.5m付近に第１集中場所、柚ノ木元調査区の水田部へと接する標高約６m付近に第２集中場所の２ヶ所に集中場所を認めることが出来る。第１集中場所はＩ層下部からII層に対応し、第２集中場所はIV～VII層に対応する。第２集中場所は水田部分と接する地点であるが、水田耕作時における攪乱層の中に時期が混在する形で多くの遺物が出土した。



第31図　平榎西斜面遺物の平面分布と垂直分布図

3）出土遺物

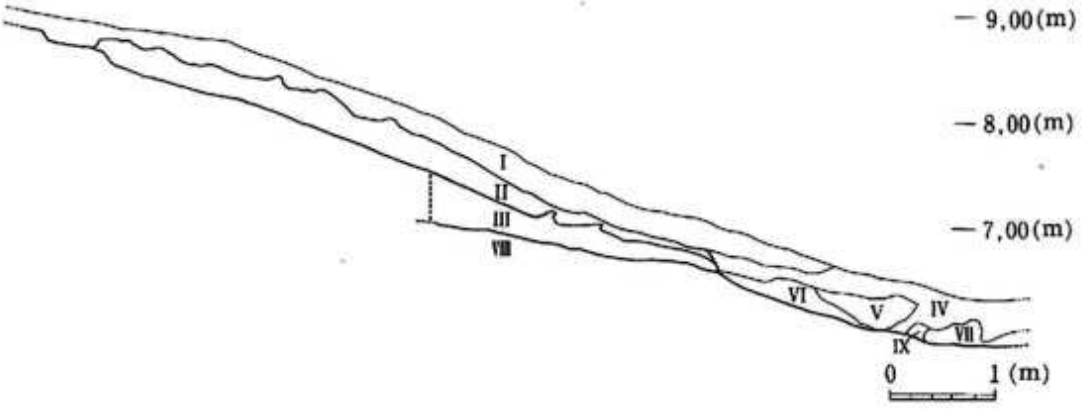
第II層の遺物

第II層からは土師器の坏、皿、甕、碗等が主に出土した。

土師器（1～12）…1～4は坏で口径を復元すると2が11.9cm、3は12.6cm、4は14.1cmを測る。底部の調整はいずれも静止ヘラ切り後ナデを施す。5は皿で口径18.1cm、口縁部は窪みを持つ。6～10は甕である。8を除く甕には外面にハケを施す。5は体部から真直ぐに立ち上がり内面に稜を持ち緩やかに外反し、口縁部は上向きに面をなす。8はやや膨らむ体部から緩やかに立ち上がり口縁部は丸く収まり内面はヘラ削りを施す。9は緩やかに外反し外に向け面をなす。10はくの字状に屈曲し口縁部は丸く収まるが内面は凹む。11、12は内黒土器碗である。11は口径19.2cm、器高6.8cmを測る。内外面ともにヘラ磨きを行い外底面にまで及んでいる。高台は貼り付けで断面三角形をなす。12は高台を欠損している。口径18.4cmで体部下半はヘラ削りを施しその後内外面ともヘラ磨きを行う。

瓦器（13、14）…13、14ともに瓦器碗の底部である。13は調整が不明瞭で高台は長方形で外に張り出す。黒灰色を呈し胎土も砂粒をほとんど含まない。14は内面にヘラ磨きが認められる。

東播磨系捏鉢（15～18）…15は口縁端部外面の屈曲部を丸く収める。16、18は屈曲部にやや稜を持ち、屈曲部に黒灰色の釉がかかる。18は口径24.6cmを測る。16は口縁端部直下に内外面



第32図　平榎調査区西斜面土層断面図

第14表　平榎調査区西斜面土層観察表

I　層	黒褐色軟質土層	表土。
II　層	黄暗褐色軟質土層	アカホヤ（III層）が混じる。
III　層	黄褐色軟質土層	アカホヤ層の２次堆積層と思われる。
IV　層	淡黒褐色粘質土層	I層とVI層の混じり。
V　層	黒褐色粘質土層	少し緑色味をおびる。
VI　層	灰色粘質土層a	白味が強く、I層も若干混じる。
VII　層	灰色粘質土層b	黒味が強く、柚ノ木元III層に類似する。
VIII　層	暗褐色硬質土層	

ともに回転ナデ調整による凹が認められる。17は屈曲部の稜が明瞭で縁帯状に外方へ突出している。屈曲面に釉がかかる。

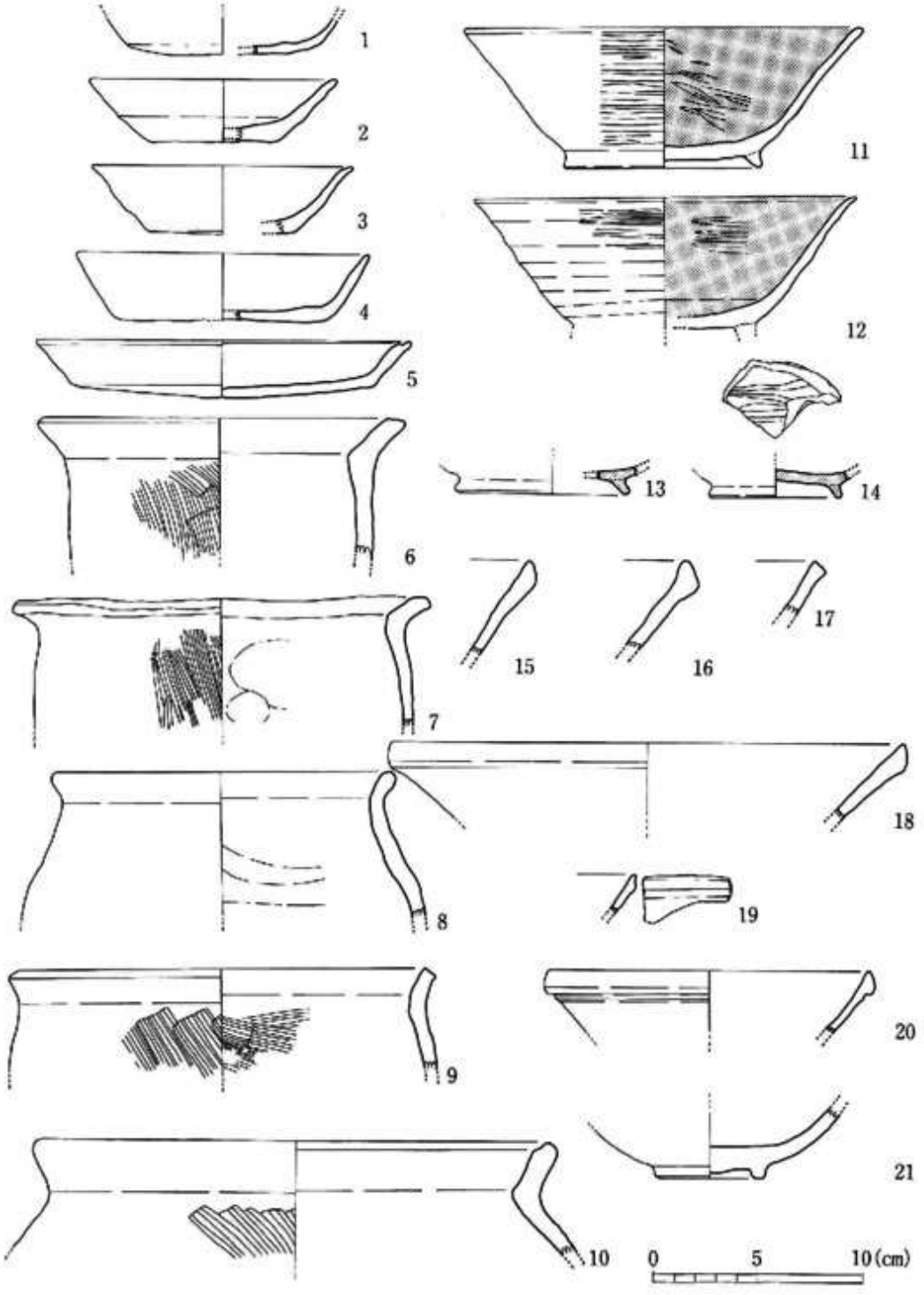
輸入陶磁器類（19～21）…19、20は白磁で19は小さな玉縁状の口縁で、20は乳白色の施釉で大きな玉縁を持つ。21は龍泉窯系青磁碗で淡緑青色の釉を施し、畳付と高台内にも釉がかかる。

以上、II層については９世紀中頃前後（１～12）を中心とする包含層と思われるが、13、14は12世紀、15～19までは12世紀中頃～13世紀中頃、20、21は14世紀代に位置づけられ若干の中世期の遺物の混入も見られる。

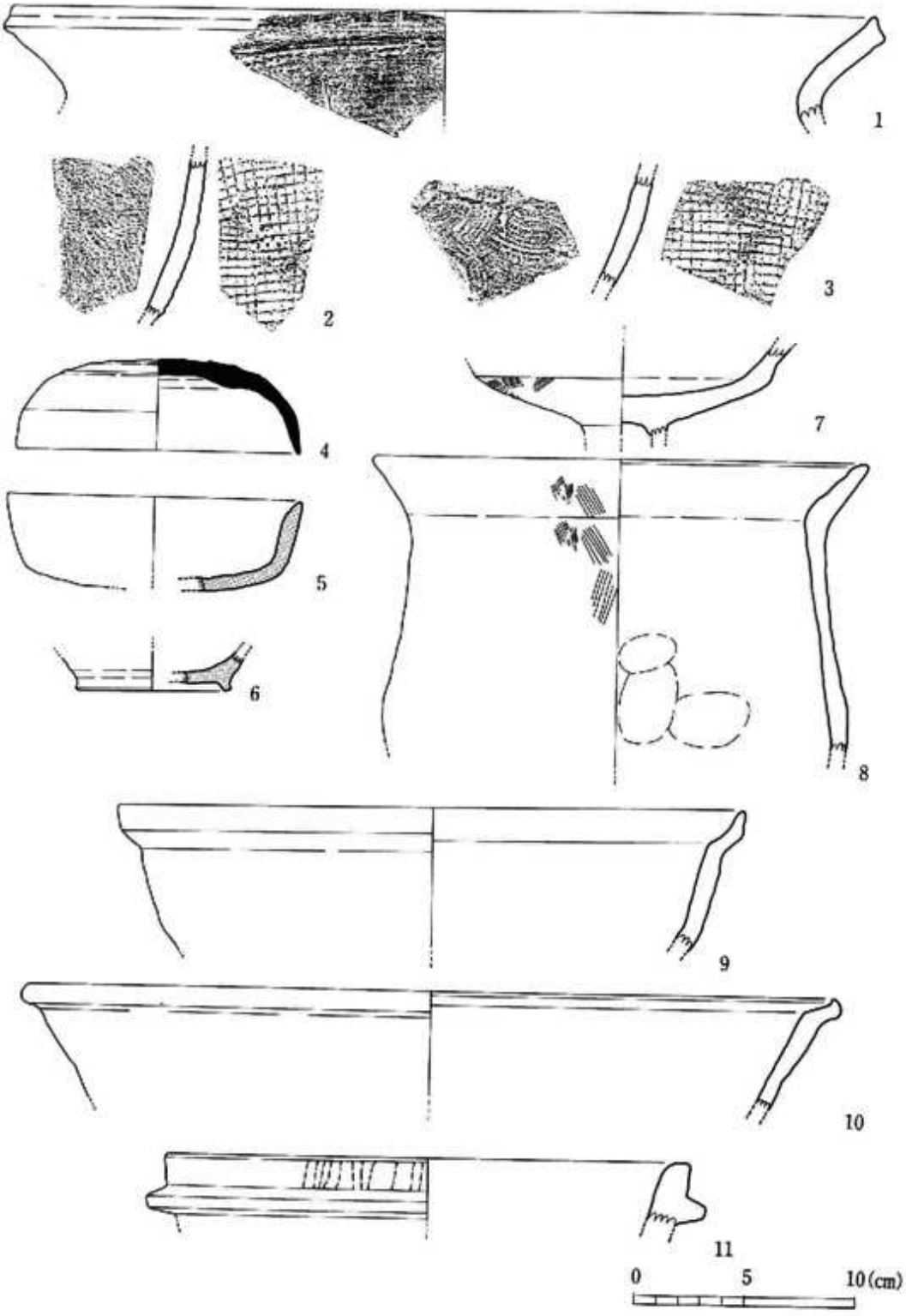
第IV～VII層の遺物

第IV～VII層では須恵質土器、須恵器、瓦質土器、土師器、輸入陶磁器等が出土した。

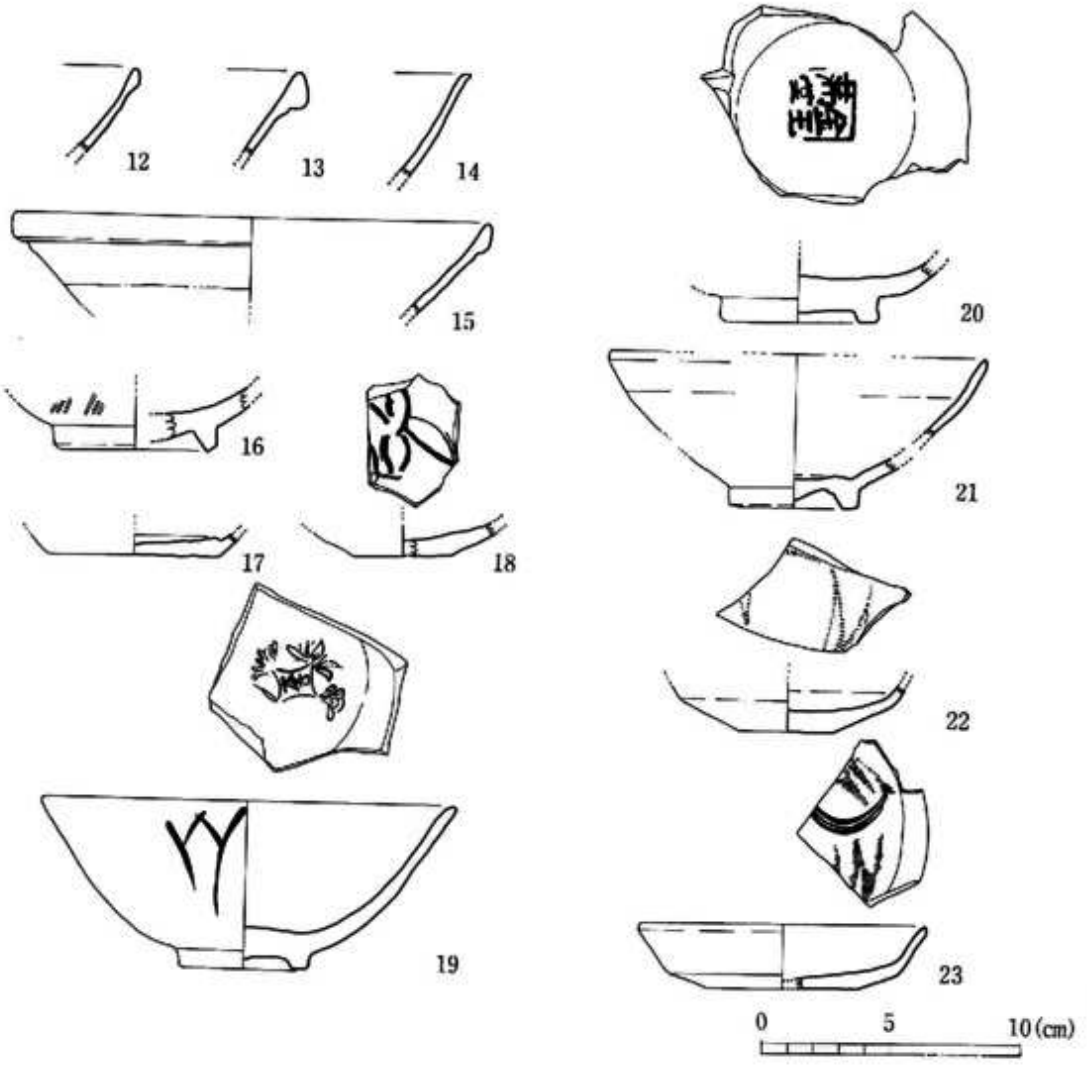
須恵質土器（１～３）…亀山焼の甕と思われ、１は口縁部が長く、角度も約90°近い屈曲部を持つ。口唇部外面に稜をなし、その直下にわずかながら格子目文タタキ後ナデが施される。内外面ともにナデ調整である。２、３は体部で外面は５㎜程度の格子目文タタキが施され、内



第33図　西斜面II層出土遺物実測図



第34図　西斜面第IV～VII層出土遺物実測図(1)



第35図　西斜面第IV～VII層出土遺物実測図(2)

面は同心円文のタタキ後ナデが施される。

須恵器（4）…坏蓋で口縁部は外反しながらのび端部はやや丸い。天井部はやや高く丸みをおび、ヘラ削りを施す。青灰色を呈する。

瓦質土器（5、6）…5は坏で平底から直線的に上方へ立ち上がる。やや磨滅している。6は碗の高台部で断面方形をなす。

土師器（7、8）…7は高坏で屈曲部に稜をなし器壁が厚い。外面にハケ目を施す。8は甕で胴部はあまり膨らまず、屈曲部より約50°程度外反する。外面はハケ目とナデ、内面はナデ

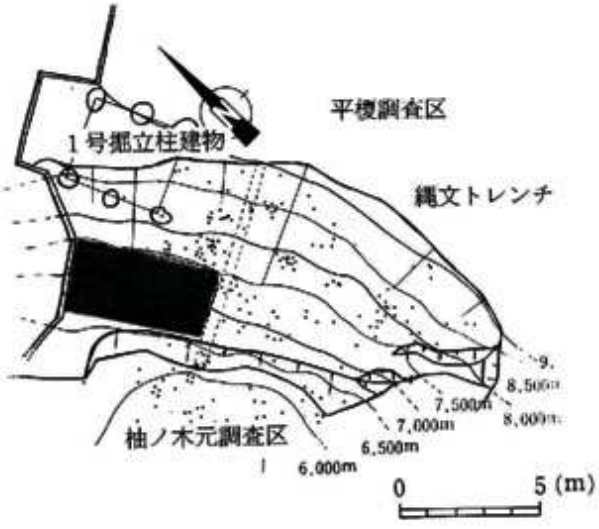
調整で指頭圧による凹が見られる。

土鍋（9、10）…9はやや直線的な体部から外反しさらに上に向かって垂直に立ち上がる。内外面ともに稜を持ち、外面にはススが付着している。10は約20°の角度をもって外反し口縁端部で内反りになる。外面のススが著しい。

石製品（11）…¼弱の小片で復元口径23.6cm。滑石製で石質は灰黒色を呈し緻密である。外面のススの付着が著しい。

白磁（12～18）…12～16までは白磁碗である。12は小さな玉縁を持つ。13、15は大きな玉縁で、15は復元口径18.6cm、外面体部中位及び内面まで乳白色の施釉。14は口縁部を外反させ端部は水平である。全面に白色の施釉。16は畳付を斜めに削り出し高台内及び体部下半には釉がかからない。内面見込み部には釉を輪状にカキ取っている。灰白色の施釉。17、18は白磁皿で、17は底部片で内外面に灰白色の施釉。底部は施釉されない。18はやや上げ底状にして底部は施釉されない。釉は乳白色で内面見込み部には草花文様が彫られている。

青磁（19～23）…19、20は龍泉窯系青磁碗で、19は明青緑色の施釉で、外面は蓮弁文様を有し、内面見込み部には「大吉」のスタンプを施す。20は緑黄色の施釉で内面見込み部に「金玉満堂」のスタンプを施す。21～23は同安窯系青磁である。21は碗で、明青色の施釉。台形状の厚い高台を有し、体部は高台部からやや内湾気味に立ち上がり、体部上位で若干屈曲する。22、23は皿で、いずれも体部中位で屈曲し、体部と見込みの境に段を有する。22は櫛によるジグザグ文様、23は櫛によるジグザグ文様とヘラによる片彫りが施される。両者共に底部には施釉されない。以上、攪乱層であるため、時期の混在が認められ、時期は3群に大別出来る。1群は6世紀代（4・7）、2群は奈良時代前後（8）、3群は前者を除く13世紀～14世紀代を中心とする時期に位置づけられる。



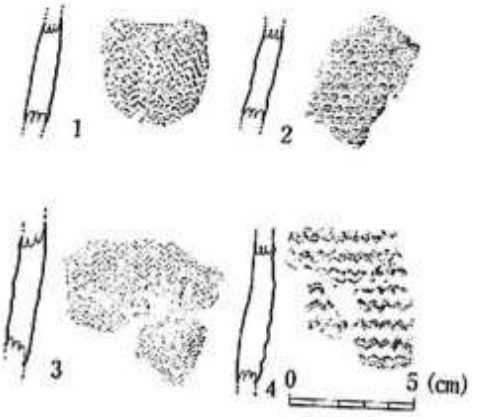
第36図　西斜面縄文時代トレンチ配置図

4）縄文時代の遺物

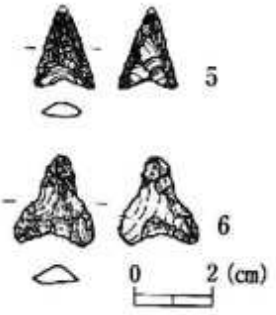
縄文時代の遺構・遺物については、西斜面において縄文時代トレンチとして一部掘り下げを行った。遺構は確認されなかったが、遺物がIII層下部からVIII層直上にかけて出土した。III層は新しい時期の遺物は全く認められず、縄文早期の押型文土器と石鏃に留まった。また、柚ノ木元調査区と接する部分では攪乱が見られIII層は認められず、VIII層直上においては他の時期との混在が認められる。当包含層は、調査終了間際であった点と工法により削平を免れる点とが重なり、遺物の出土状態も彷彿させるものでなかったので調査も必要最小限度に留めた。

5）出土遺物

1～4は押型文土器片である。1．3．4は山形文で1．3は押型文が細かく、4は粗大である。2は楕円文である。4点ともに横回転である。5．6は打製石鏃で、5は姫島産黒曜石でえぐりがやや深く比較的精緻な加工が施されている。6はサヌカイト製でえぐりが浅く風化が著しい。



第37図　西斜面縄文時代トレンチ出土遺物実測図(1)



第38図　西斜面縄文時代トレンチ出土遺物実測図(2)

汐月遺跡　柚ノ木元調査区全景（航空撮影）

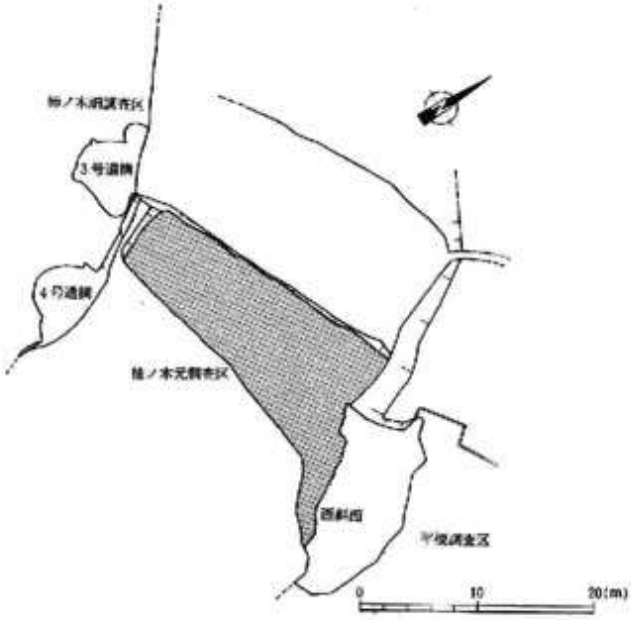
第Ⅴ章　柚ノ木元地区の調査

1．試掘と本調査の遺構概要

この地区は柿ノ木畑調査区と平榎調査区の浅い谷部分に位置して、調査前までは水田であった。東西に長く伸び　西奥の山際より東へと段を成している。この調査区は試掘の際、『吉』と墨書された土器が出土して、この総合運動公園内の調査を注目させた。この墨書土器は平榎調査区から流れ出た遺物であろうが、いずれにしても「佐伯院」の可能性を深く示す遺物で重要な意味をもつと考えられる。この状況を踏まえた上で当調査区も本調査の対象地区となった。

まず本調査では、旧水田面の有無について調査を開始する予定であったが、対象面積が広く工期等の関係上、特に柿ノ木畑調査区と平榎調査区とに挟まれた位置であることと、試掘の際に遺物を多く出土したトレンチの近くに限定して本調査を行った。しかし、旧水田面に相当する検出面は確認出来ず、他の遺構も確認には至らなかった。また、調査当時は（平成元年11月から平成２年１月まで）厳冬期の期間内で水田部掘り下げ時も泥炭層からの湧水によって水田部全体が氷を張る場面も見られ、この調査区については遺物採集程度で調査を終了した。

第39図　汐月遺跡試掘トレンチ配置図



第40図　柚ノ木元調査区範囲図

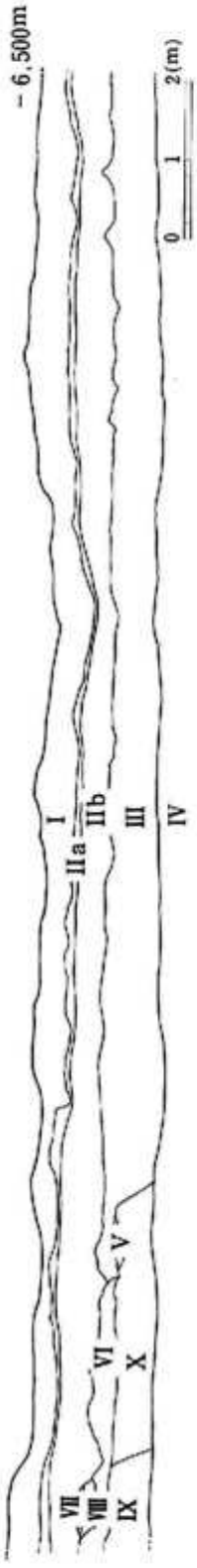
第15表　柚ノ木元調査区土層観察表

Ⅰ　層	黒褐色軟質土層	旧水田層。
Ⅱａ層	黄暗褐色硬質土層	旧水田基盤層。
Ⅱｂ層	淡茶灰色粘質土層	遺物が多く包含する。
Ⅲ　層	淡黒灰色粘質土層	泥炭層で２cm大の小礫を多数混入。若干の遺物包含。
Ⅳ　層	緑灰色粘質砂層	緑色部は藻類が堆積したものと思われる。
Ⅴ　層	黄灰色粘質土層	砂を混入。
Ⅵ　層	灰色粘質土層	礫（５mm～２cm大）を含む。
Ⅶ　層	暗褐色硬質土層	酸化鉄の塊が付着。
Ⅷ　層	黄褐色粘質層	鉄分のしみと砂が混じる。
Ⅸ　層	明灰色粘質層	白味が強く、礫を混入。
Ⅹ　層	淡緑灰色粘質層	緑色部にはⅣ層が混じる。

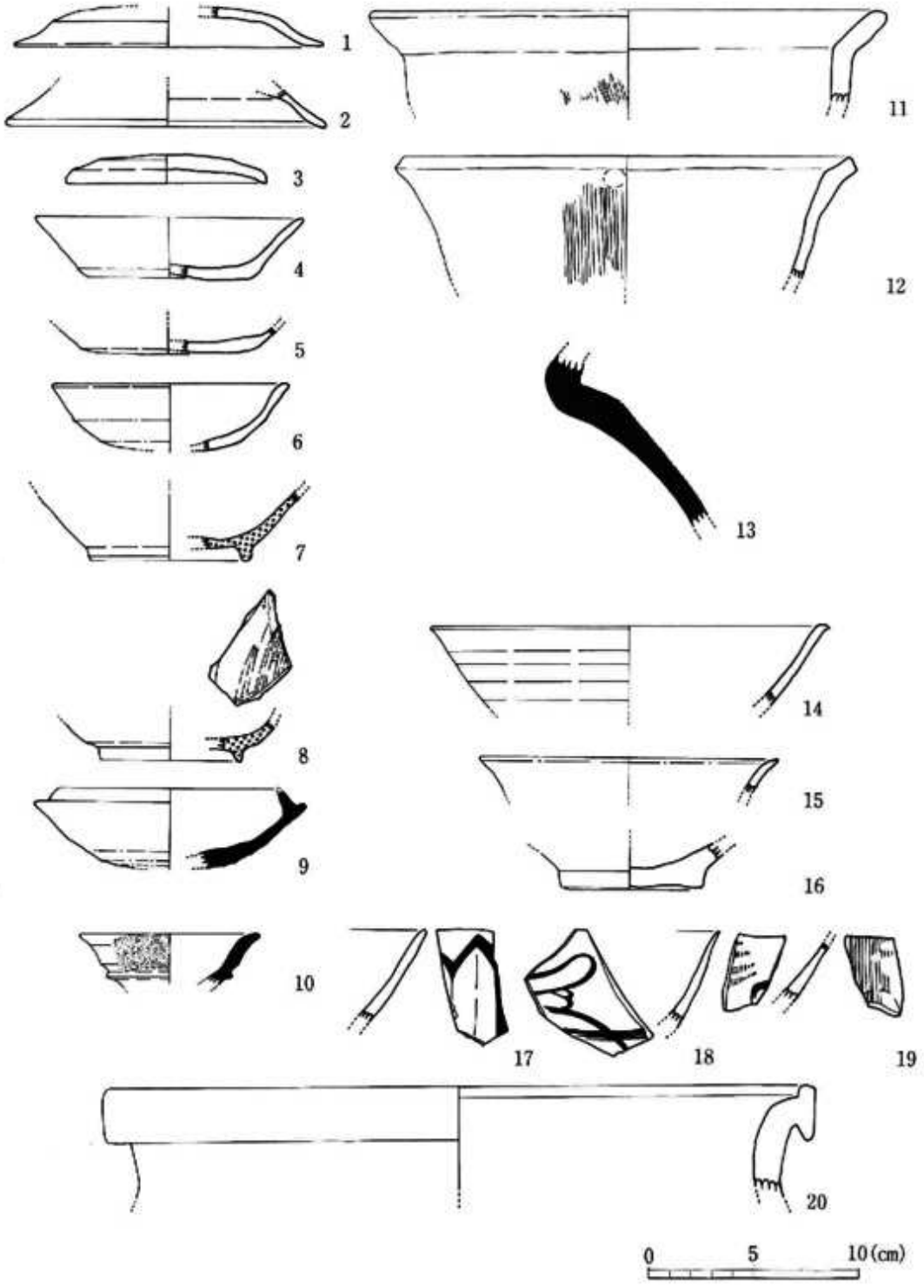
2．出土遺物

この地区の調査は調査期間を考慮して重機によって掘り下げを行ったために、出土遺物に関して層位関係は不明である。ただし、出土遺物はⅡｂ・Ⅲ層に集中し、柿ノ木畑調査区の方からはあまり認められず、平榎調査区側に片寄る傾向が認められた。出土遺物は細片が多く、試掘調査で出土した遺物も合わせて図示した。

土師器、須恵器、輸入陶磁器等が出土した。



第41図　柚ノ木元調査区西壁土層断面図



第42図　柚ノ木元調査区出土遺物実測図

蓋（1～3）…1・2は頂部がやや底平で屈曲し口縁端部でさらに水平に外へ折れ曲がる。摘みは付かない。3は低い頂部からそのまま断面逆三角形に近い口縁部を呈する。

坏（4・5）…4は口径12.9cm、口縁部は大きく外反しながら開く。底部はいずれもヘラ切りの後ナデを施す。

碗（6・7）…6は口径11.3cmを測り、体部中位よりヘラ削りを施す。7は底径7.6cmを測り高台は断面方形を呈する。

黒色土器碗（8）…体部下半に稜をなし内面にはヘラ磨きを施す。高台は断面三角形をなす。

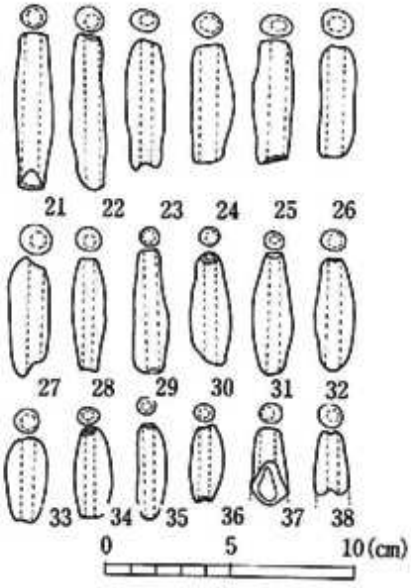
須恵器（9・10）…9は坏身で立ち上がりはやや内傾してのびる。受部は上外方にのび、端部はやや丸い。内面は回転ナデ、外面は回転ナデと回転ヘラ削りを施す。10は甕で口径7.2cm。丁寧な作りで、口縁端部は緩やかに外反し、外面に波状文を施す。

甕（11・12）…いずれも口縁部で屈曲し、11は直立気味の体部、12は斜上方向にのびる体部を呈する。胎土は角閃石を多く含む。

須恵質土器（13）…亀山焼の甕である。外面に格子目文タタキで、格子目は方格5mm～3mmである。内面は同心円タタキの後擦り消しが認められる。

白磁（14～16）…14は碗で口縁部を外反させ、端部を平らにしている。16は碗の底部片で、底部をやや上げ底状にし、体部と底部の境は明らかである。15は皿で口縁部が口禿になったものである。

青磁（17～19）…17・18は龍泉窯系青磁碗である。17は外面に鎬蓮弁文を施す。18は内面に



第43図　柚ノ木元調査区出土土錘実測図

第16表　柚ノ木元調査区出土土錘計測表

	最大長mm	最大幅mm	重さg		最大長mm	最大幅mm	重さg
土錘No.21	62.9mm	16.4mm	13g	土錘No.30	45.0mm	16.4mm	8g
土錘No.22	63.9mm	14.0mm	11g	土錘No.31	48.4mm	15.4mm	10g
土錘No.23	49.3mm	15.7mm	10g	土錘No.32	45.2mm	16.7mm	8g
土錘No.24	48.3mm	17.6mm	11g	土錘No.33	34.6mm	16.3mm	6g
土錘No.25	49.0mm	16.5mm	10g	土錘No.34	36.0mm	14.8mm	5g
土錘No.26	44.5mm	14.2mm	8g	土錘No.35	39.1mm	10.7mm	3g
土錘No.27	47.5mm	16.1mm	9g	土錘No.36	30.3mm	13.8mm	4g
土錘No.28	47.4mm	13.0mm	9g	土錘No.37	*30.1mm	*14.8mm	* 4g
土錘No.29	41.0mm	15.0mm	8g	土錘No.38	*45.7mm	*12.9mm	* 5g

（*は欠損品）

花文様を片彫りしている。いずれも緑黄色の施釉。19は同安窯系青磁碗片で外面に細かい櫛目を有し、内面はヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様を施文している。

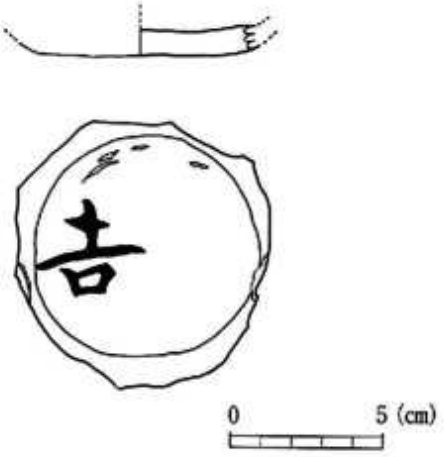
甕（20）…常滑焼の甕で、口径33.4cm、縁帯部2.6cmを測る。内外面に釉がかかり、色調は緑茶褐色を呈する。

土錘（21～38）…すべて管状土錘である。色調は白褐色を呈するものと黒色を呈するものとに分かれる。胎土は角閃石、石英等を含むものが多い。

以上、時期については3群に大別出来る。1群は5世紀後半～6世紀後半代（9・10）に位置づけられるもので10の甕は5世紀後半に相当し、古式の様相を呈する。2群は9世紀代（1～9、11・12）に、3群は13世紀～14世紀を中心とする時期に位置づけられる。

3．墨書土器について

土師器の坏である。底部に「吉」と楷書で墨書されている。内面には朱を施す。底部はヘラ切り後ナデ調整を行っている。時期は奈良時代後半代～平安時代前半代と思われる。



第44図　墨書土器実測図

第VI章　ま　と　め

本調査は佐伯市総合運動公園開発事業に伴う、3調査地区約8000m²にわたる緊急発掘調査であった。過去の佐伯市における発掘は数例に過ぎず、今回の調査によって得られた成果は少なくない。

ところで当遺跡は発掘前より幾つかの留意すべき点があった。1.　佐脇貫一氏らによって推察されている[註1]平安時代の佐伯荘、佐伯院などの官衙施設跡の所在の有無、2.　中世、佐伯氏の支分荘であった堅田六十町における佐伯氏の居館跡の有無、3.　試掘時における「吉」と記された墨書土器の出土、などである。これらの点を念頭に置き各調査区ごとにまとめを行ってみたい。

柿ノ木畑調査区

この調査区では古墳時代及び近世の遺構を検出した。1・2号遺構付近の柱穴は覆土の状況から古墳時代の柱穴であると思われるが、上部が削平を受けていることと、3・4号遺構において弥生終末に比定出来る遺物の出土があることから竪穴式住居跡に伴うものか掘立柱建物跡に由来するものかは現時点においては不明確であり、Ｐｉｔは配列も不明瞭である。

各遺構出土の遺物は、1号遺構からは高坏、小型丸底壺（5図－3～5）が出土し、これらは、竹田市楠野遺跡[註2]におけるⅢｃ期に比定されているものと同様であり、5世紀中頃に位置づけられる。2号遺構については明確な特徴を示す遺物の出土がなかったが、覆土の状況から考えると1号遺構とほぼ同時期か、それに近い時期と考えられる。古墳時代後半の遺構としては3・4・6号遺構がある。この遺構はいずれも柚ノ木元調査区へと落ちる斜面の縁辺に位置する。遺物は弥生終末期に位置づけられる複合口縁壺や甕（10図－2・8）も認められ、大野川流域の野津町日当遺跡[註3]等で出土するものに類似する。3・4・6号遺構からは須恵器が出土しており、陶邑編年[註4]のⅡ型式3・4段階（ＴＫ－43窯式・ＴＫ－209窯式）に比定でき、この遺構の年代の下限は飛鳥寺下層期（589年）とする年代が求められ、6世紀後半と考えられる。

5号遺構の集石に関しては前述した通り、祭祀或いは埋葬に関係する遺構であると思われるが、掘り込み及び遺物を伴わないために時期も不明確である。7号遺構については肥前陶磁器類の出土によって18世紀後半から19世紀中頃に位置づけられる。8～10号遺構は近世以降の遺構と思われるが、8号遺構にのみ石臼片を出土している。この遺物のみで明確な時期判断を下すことは難しい。当初、この遺構については臼杵市戸室台遺跡[註5]で発見されている中世の火葬墓に類似した様相を呈するために、近世期における火葬墓ではないかと考えたが、土層の状況から判断してその可能性は低い。また、この堅田一帯は少なくとも近代初期においては依然、土葬が埋葬の主体であり、伝染病に関してのみ火葬を行っていたらしく、その火葬場域も指定

された範囲内に留まりその範囲を逸脱することはなかったという。[186] また、久保常晴氏によると江戸時代に入っては儒教の影響から火葬して灰塵とするのは倫理に反するとして、一部の地域を除いては土葬に従ったようである。[187] 以上の点からこれらの遺構に関して火葬墓として捉えるのは非常に難しく可能性も薄い。従ってこれらの遺構の時期的な位置づけと性格については今後の発掘事例を待ちたい。

平榎・柚ノ木元調査区

平榎調査区で注目すべき遺構は、1号掘立柱建物跡である。宇佐市弥勒寺跡[188]では8世紀から16世紀にわたる土師器編年案が提示されているが、これを援用すると、柱穴内から出土した土師器は8世紀中頃に比定される。この遺構が問題となる点は、先に述べた佐伯院の推定地であり、柚ノ木元調査区において試掘時に墨書土器が出土した点である。そもそも佐伯院は古代豊後の四官倉（湯布院・野津院・安心院）の1つであったとされ、いずれの地方においてもその所在は明らかにされていない。佐伯院については平安時代後期の文書「本朝世紀」のなかで藤原純友の乱の際に「豊後国海部郡佐伯院に襲い来たり…」とみえる。古藤田太氏は「佐伯院は院倉が置かれた地域を指すが、佐伯院については野津院や湯布院のように公領荘園制社会の単位をなす広い範囲を指すものでなく、院倉の置かれた地域のみを呼称した。」[189]としている。この平榎を含む上ノ台を佐伯院と推測されたのは安藤氏、佐脇氏であった。その根拠として第2次世界大戦中に上ノ台の北の一部を開墾した際に遺物が出土したためで、[190] 以後、佐脇氏は本朝世紀などの史料から補足を加えている。今回検出した1号掘立柱建物跡をもって佐伯院及び官庫であるというのは甚だ早計であるが、「吉」と銘書された墨書土器を合わせると可能性が皆無であるとは言えない。しかし、1棟のみの検出であり他の建物である可能性も考え併せれば、未だ問題点となる点も多く、将来の「上ノ台」の全容解明に期待を委ねたい。

次に平榎西斜面・柚ノ木元調査区は縄文早期から中世に至るまでの遺物を出土したが、特徴のあるものについてまとめる。西斜面と柚ノ木元調査区で出土した遺物は平榎・上ノ台からの二次堆積で柿ノ木畑側からの流れ込みは微量であると思われる。以下、大きく4期に大別する。I期は縄文早期の押型文土器、石鏃（図－37、図－38）である。II期は古墳時代後半代で図－34－4・7、図－42－9・10等がこの時期であるが、中には古式須恵器の様相を持つ図－42－10の破片も出土している。この時期の遺物については柿ノ木畑調査区からの流れ込みであろうと考えるが、上ノ台においてこの時期の遺構の有無については不明であるため、柿ノ木畑・上ノ台いずれの台地によるものかは判断出来ない。III期は平榎1号掘立柱建物とほぼ同時期の奈良時代後半から平安時代前半にかけての遺物である。遺物は底部ヘラ切りの杯（図－33－1～4）、皿（図－33－5～10）、内外面ヘラ磨きを施す内黒土器埦（図－33－11・12）等がある。IV期は13世紀から14世紀にかけてのものである。遺物は、須恵質土器、甕、輸入陶磁器等があり、輸入陶磁器では白磁、龍泉窯系・同安窯系青磁が出土している。白磁碗は小さな玉縁

を有するもの（図－35－12）、大きな玉縁を有するもの（図－35－13・15）などがあり、皿は底部をやや上げ底状にしている（図－35－18）ものもある。龍泉窯系青磁碗の中には「金玉満堂」や「大吉」とスタンプを押す（図－35－19・20）ものがあり、太宰府編年の1－5－d類に属するタイプも見られる。須恵質土器には東播磨系捏鉢（図－33－15～18）、B－II類、C類、と亀山焼の甕（図－34－13）が出土している。豊後地域で輸入陶磁器を出土する遺跡は近年その数を増し、中でも三光村佐知遺跡はまとまって出土し、注目されている。しかし、先述した須恵質土器については県下において報告が少なく、今後この時期における遺物については注意を要する。以上、遺物によってI期～IV期に大別したが、ここで問題となるのはIV期の13世紀～14世紀の遺物の出土である。中世この地域を治めていたとする佐伯氏との関連、居館の問題を考慮しなければならない。佐伯氏の居館については栂牟礼東麓、高城山麓、上ノ台等とする諸説がある。栂牟礼城の築城は16世紀初頭ではないかと考えられ、それ以前の佐伯氏の所在については不明な部分が多い。その不明確な原因としては近世期における毛利氏の移封によって、古文書等の排斥に起因するものと思われる。今回出土した遺物をもって即、佐伯氏の居館とは言い難いが、当遺跡約100mに位置する宇山城の関係、上ノ台を開墾した際に出土した「正平2年」(1347年）と年号を刻む五輪塔等、立地条件的な観点などからすれば居館が存在した可能性の方がむしろ高いと推測できる。この一帯を含む堅田地区は豊後図田帳より佐伯本荘の支分荘、堅田六十町であったとされ、その領有は分家堅田（片田）氏であったとされる。この点から佐伯氏の居館とするよりも、堅田氏に関連する遺構が存在する可能性がより高いものと考える。ただし、栂牟礼城の築城年代が16世紀であるとするならば、遺物の時期と若干の差異が認められ問題も多く、また、佐伯氏惣領家から堅田氏への居館の継承という点も考慮する必要もあろう。いずれにしても、遺構を伴わない以上、推測的判断と言わざるを得ず、現地保存される「上ノ台」の今後の調査と、現在栂牟礼山東麓で行っている栂牟礼城址関連遺跡の発掘調査を待って今後詳細に考察すべきであろう。

註(1) 佐脇貫一「堅田－上ノ台遺跡について」『佐伯史談』 第13号 1966

註(2) 小柳和宏『楠野』大分県文化財調査報告書第63輯 大分県教育委員会 1983

註(3) 牧尾義則『日当遺跡』大分県文化財調査報告書第58輯 大分県教育委員会 1982

註(4) 井藤徹他『陶邑V』大阪府文化財調査報告書第33輯 大阪府教育委員会 1980

註(5) 菊田徹 「臼杵の中世墳墓とその源流」『大分県地方史』 第137号 1990

註(6) 佐伯市真正寺由良住職、疋田収一氏の御教示による。

註(7) 久保常晴「墓地と火葬場」『仏教考古学講座第7巻墳墓』 1984

註(8) 宮内克己「出土土器編年」『弥勒寺』所収大分県風土記の丘歴史民族資料館 1989

註(9) 古藤田太『佐伯史談』 第61号 1975

註(10) 現在その遺物の所在は不明である。

註(11) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」九州歴史資料館研究論集 4 1978

註(12) 寺島孝一他『魚住古窯跡群発掘調査報告書』明石市教育委員会・平安博物館 1985

註(13) 岡田博「亀山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査 3』岡山県教育委員会 1988

註(14) 坂本嘉弘『佐知遺跡』大分県文化財調査報告書第81集 大分県教育委員会 1989

註(15) 小野英治「栂牟礼時代における佐伯氏の居館について」『栂牟礼城風雲録』南海新報叢書1981

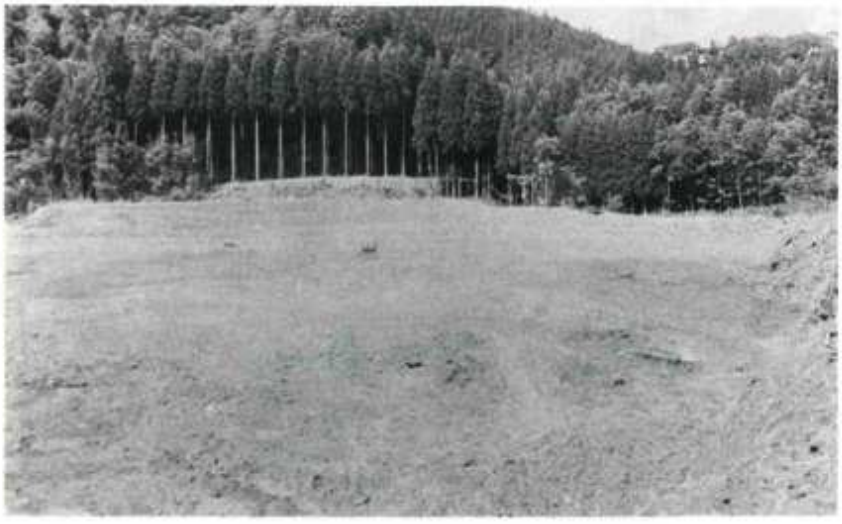
註(16) 岩田善市「中世の城、堅田高城を訪ねて」『大神一族と佐伯氏』南海新報叢書 1981

註(17) 註(1)に同じ

註(18) この記述にすると堅田地域だけが栂牟礼城築城以前の居住域となりかねないが、筆者は必ずしもこの地域だけに限定するのではなく、佐伯氏の居館についてはむしろ栂牟礼城東麓説を推し勧める立場を取りたい。

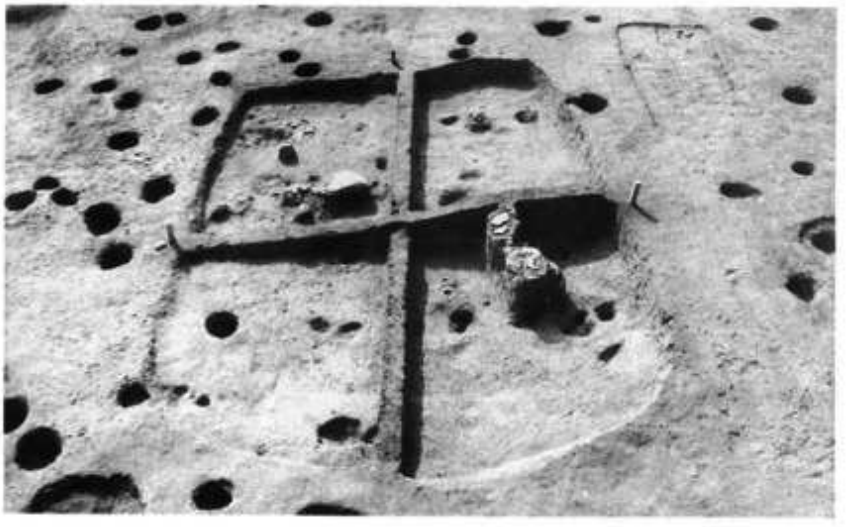
図版－1
柿ノ木畑調査区
試掘状況

図版－2
柿ノ木畑調査区
表土除去作業風景
（東から）



図版－3
柿ノ木畑調査区
表土除去直後風景
（東から）

図版－4
柿ノ木畑調査区
遺構検出状況
（8号遺構付近）
（東から）



図版－5
柿ノ木畑調査区
1号遺構
（北から）

図版－6
柿ノ木畑調査区
2号遺構
（北西から）

図版－7
柿ノ木畑調査区
2号遺構内
中央炉と遺物出土
状況（北から）

図版－8
柿ノ木畑調査区
3号遺構遺物出土
状況（北から）

図版－9
柿ノ木畑調査区
3号遺構完掘状況
（南から）

図版－10
柿ノ木畑調査区
4号遺構遺物出土
状況（北西から）

図版－11
柿ノ木畑調査区
5号遺構

図版－12
柿ノ木畑調査区
8号遺構
遺構内集石状況
（北から）

図版－13
柿ノ木畑調査区
8号遺構究掘状況
（北から）

図版－14
柿ノ木畑調査区
9号遺構（北から）

図版－15
柿ノ木畑調査区
遺構検出作業風景

図版－16
平榎調査区調査前
風景（西から）

図版－17
平榎調査区
遺構検出作業風景
（西から）

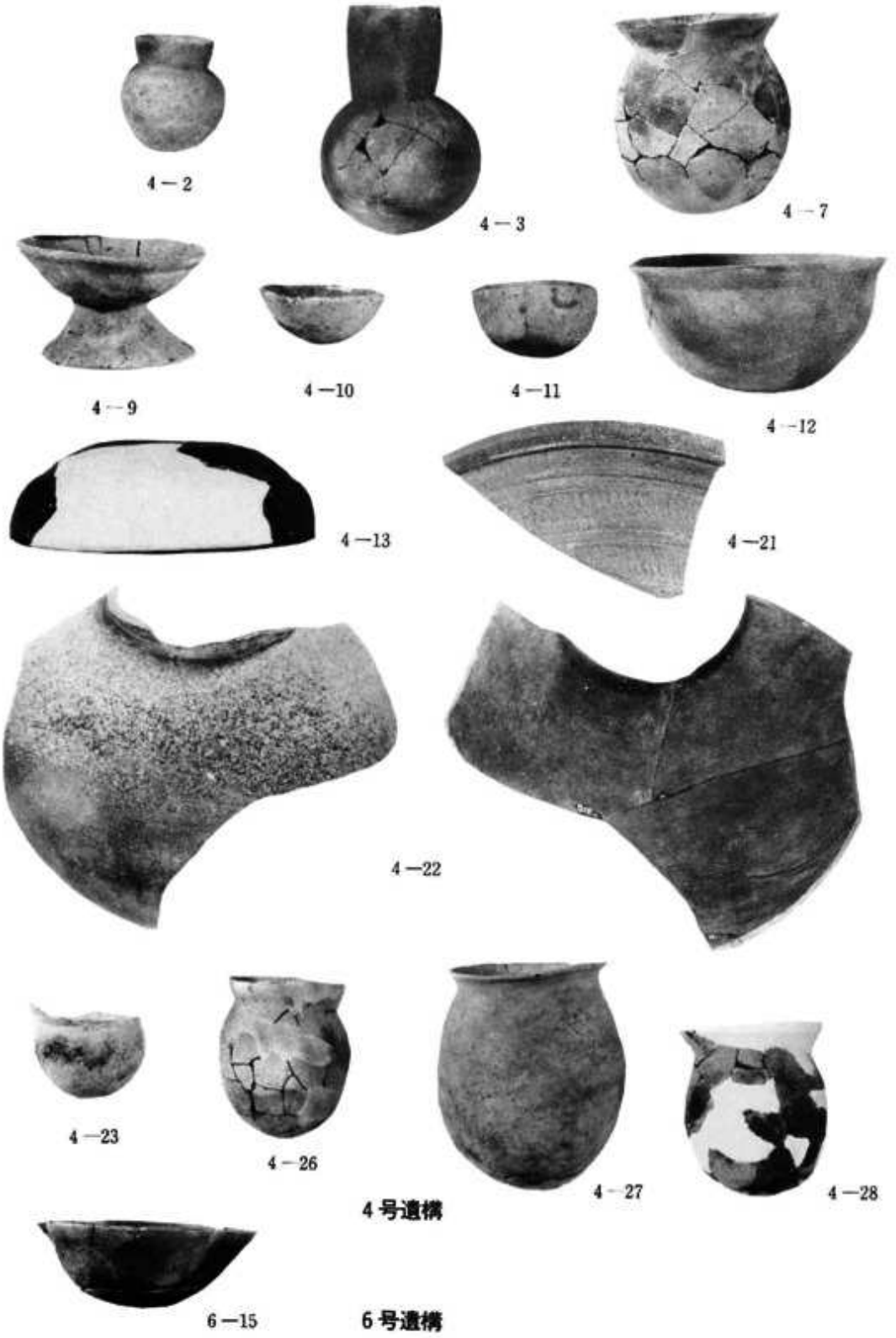
図版－18
平榎調査区
1号掘立柱建物跡
（東から）

図版－19
平榎調査区
西斜面土層断面

図版－20
平榎調査区
縄文トレンチ

図版－21
柚ノ木元調査区
試掘状況

図版－22
柚ノ木元調査区
土層断面
（南東から）



図版－24　出土遺物 (2)

7－3

7－4

7－8

7－9

7－11

7－11

7－12

7－13

7－15

7号遺構

8－1

8号遺構

図版—25　出土遺物 (3)

1号掘立柱建物柱穴出土遺物－2

第II層－4

第II層－11

第IV層～VII層－11

第IV層～VII層－19

第IV層～VII層－20

縄文時代
トレンチ出土遺物－1

縄文時代
トレンチ出土遺物－2

縄文時代
トレンチ出土遺物－3

縄文時代
トレンチ出土遺物－4

柚ノ木元調査区
出土墨書土器

図版－26　出土遺物　(4)

発掘調査に従事して頂いた方々

染矢幸子・高瀬金一・高瀬キヌ・宮本新一・浜田千枝子・染矢千恵子・泊　清春・吉川キミ・疋田月夫・疋田賢子・田中隆治・田中ヨシ子・柳井美家子・久保田実福・小山人士・田中千代・佐藤和己・佐藤澄子

平成元年７月の試掘調査、１０月からの本調査の発掘作業に従事して頂き、夏の暑い時期から冬の寒い時期を通して大変ご苦労様でした。心より感謝申し上げます。　　（新宅信久）

汐月遺跡

SHIO TSUKI I SEKI

大分県佐伯市総合運動公園建設事業に伴う緊急発掘調査報告書 I

1990年3月31日

発行　佐伯市教育委員会

〒876　佐伯市中村南町1-1
電話（0972）22-3111

印刷　佐伯印刷株式会社

本　社：〒870-91　大分市古国府1155-1
電話（0975）43-1211

佐伯工場：〒876　佐伯市中央区新屋敷343
電話（0972）23-0170